
君へ「ありがとう」

要徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君へ「ありがとう」

【ZPDF】

Z0188Z

【作者名】

要徹

【あらすじ】

運動音痴で有名な鹿島俊夫は、毎年開催される運動会が嫌いで仕方なかつた。だが、鹿島に危機感はない。なぜなら、彼よりも運動音痴である、藤堂博という生徒がいたからだ。

ある日、鹿島と藤堂は出場種目を決定する際にひょんなことから「クラス対抗リレー」のメンバーとして選ばれてしまう。クラス全員から罵倒されるが、それに変更はきかず、二人は窮地に立たされる。

落胆する鹿島だったが、「あいつらを見返してやるつよ」という

藤堂の励ましによつて息を吹き返す。

そして鹿島俊夫と藤堂博の二人は、運動会に向けて特訓を始める。

— 語り始め（前書き）

この作品の制作時期は2009年9月頃で、過去作品となります。当時の私のオリジナリティを尊重する為、誤字や脱字などの修正を除いて手を加えません。気になる部分は多いと思いますが、前作と比較して作者の成長を感じ取ってもらえればと思います。

—語り始め

黄金に輝くイチョウ並木を清涼な風が吹き抜ける。風が吹く度に金木犀の香りが周囲に漂う。その香りを胸一杯に吸い込みながら、ある男が歩いて行く。

男は長い髪を左右に分け、スーツを着用し、凛々（りり）しい顔つきである場所を目指す。ある場所とは、取引相手の会社だ。失敗の出来ない重要な商談がこれから待ち構えているのだ。

会社が近づいてくるにつれ、自然と体が強張りはじめる。男は気を落ち着けるため、ポケットから飴玉を一つ取り出し、封を開いて口に放り込んだ。甘い葡萄の味が口の中いっぱいに広がる。

飴玉を舐めながら歩いていると、取引先の会社が見えてきた。それは莊厳な雰囲気をまとい、近づき難い。しかし、それでも彼は行かなくてはならない。男の勤める会社の存続がかかっているのだ。

男の勤める会社はどこにでもある中小企業の一つだ。だが中小企業といつても、かなりの売り上げ実績を誇つており、その勢いは大企業をも凌駕するほどだった。だが、昨今の金融危機の余波を受け、今や倒産の危機に瀕している。会社はリストラなどの措置を行つたが、経営状況が改善されることはなかつた。そんな路頭に迷つていた企業に天から蜘蛛の糸が垂らされたのだ。

『一度弊社に来て、商品の説明を行つていただけませんか』と。

男の勤める会社の社長は、この機会を逃すまいと、会社一番の古株であり、数々の交渉を成功させた彼に、この仕事を一任したのだ。どうせこの商談が成立しなければ自分も終わりだ、と考えた彼は社長の任命を快く受けた。

普段よりも念入りに髪型を整え、髪を丁寧に剃り、スーツはクリーニングに出して見栄え良くした。

準備は万端であるのにも関わらず、いざ会社を出すると、体は言つことを聞かなかつた。男が左腕に付けた時計を見てみると、体は時三十分を指していた。まだ商談まで時間が少しあつた。

男はもう一つポケットから飴玉を取り出し、口に頬張つた。ころと飴玉を口の中で転がし、氣を落ち着けた。それでもまだ落ち着かない彼は、近くに備え付けられていた自動販売機で、ソーダ水を購入した。ひやりとした缶がとても心地好い。男は煙草も酒もない。その代わりに炭酸飲料を愛飲しているのだ。ぱちぱちと弾ける炭酸が彼の心を落ち着けた。

男はソーダ水を一気に飲み干すと、それをゴミかごへと放り投げた。金属の触れ合つ音が周囲に響く。そして、大きく深呼吸をすると会社の中へと入つて行つた。

中は外見の莊厳さとはうつてかわつて、質素なものだつた。特に派手に飾りつけられているわけでもなく、どこにでもある、ありきたりな内部構造をしていた。

受付へと真っ直ぐに向かつていき、挨拶をし、名刺を差し出した。

受付嬢も元気よくそれに応えた。

「お待ちしておりました。鹿島様ですね。ご案内致しますので、ご一緒についてきてくださいませ」

鹿島は一礼してから受付嬢について行つた。エレベーターに乗り、七階にある会議室へと向かつた。七階です、という機械音がエレベーター内部に響くと、緩やかな速度で扉が左右に開いた。

「どうぞ。そちらの部屋で担当がお待ちしております」

受付嬢は一礼すると、エレベーターでまた下へと戻つていつた。

鹿島は緊張のあまり、礼を言つことを忘れていた。

鹿島は一抹の不安を抱えながら、会議室の扉をノックした。すると、中から男の声が返ってきた。そして、鹿島はノブをゆっくりと回し、扉を開いた。

中には短髪で、目尻が垂れている男が椅子に座っていた。その椅子は真っ黒で、程よく艶がかかるおり、とても高級そうに見える。鹿島は緊張で声が出せずにいた。会議室が重々しい沈黙に包まれている。その沈黙が破られるまで、一分となかつたが、鹿島にはその時間が一時間のように感じられた。

「おはようございます」

短髪の男が沈黙を破った。鹿島も慌てて頭を下げ、おはようございます、と挨拶をした。

「どうぞ、こちらへ来て座つてください」

「あ、はい。遠慮なく」

鹿島は椅子に座ると、重大なことを思い出した。名刺を渡すこと忘れていたのだ。鹿島は狼狽して椅子から立ち上がり、申し訳ない、と謝った。鹿島のその慌てよつとは裏腹に、短髪の男は笑っていた。

鹿島は名刺ケースから自分の名刺を取り出そうとした。が、あまりに慌てていたためにバラバラと名刺を床へ落としてしまった。鹿島は急いでそれらを拾う。鹿島が慌てていると、短髪の男が屈み込み、一枚の写真を拾い上げた。その写真には、万国旗を背景に、笑顔の子供二人が写っていた。

「娘さんと、息子さんですか？」

鹿島はすべての名刺を拾い終わると、短髪の男の質問に答えた。

「ええ。今年で十一歳と八歳です」

「それはそれは。可愛い年頃でしょう？」

「ええ、本当に。ですけど、手がかかりましてね」

鹿島は苦笑いを一つした。手がかかるとは言つたが、それも鹿島にとつては気にならないことだった。それほどまでに娘と息子が可

愛」のだ。

「「」の写真は、運動会のものですか？」

「今年の運動会で撮影したものですね。息子がリレーで一等賞を取
りまして。その記念です」

「そういえば、もつそういう時期なんですね」

短髪の男が窓から外を眺める。短髪の男が鹿島の方を振り返ると、
鹿島が声を押し殺して泣いていた。

「どうかなさいましたか？」

鹿島は涙をハンカチで拭きとり、鼻をすすつた。

「いえ、運動会に少し思い出がありましてね。その時のことと、親
友のことを思い出しましてね」

「ほつ、それは興味深い。よろしければ話していただけませんか？」

商談なんて、その後でも良いでしょう

短髪の男は椅子へと座り、机に置かれている茶を啜つた。

「よろしいのですか？ 少し長くなるかもしれません」

「ええ、構いませんとも」

「それでは、リクエストにお答えして」

鹿島も高級そうな椅子に腰掛け、一口茶をすすつた。

そして、彼の運動会での出来事を話し始めた。

「「」からお話ししましょうか。ああそうだ。私は小学生でした。あ
の時も今と同じようにイチヨウや金木犀が綺麗な時期でしたね。私
はいつもこの時期が憂鬱ううつで仕方がなくて」

鹿島は淡々と思い出を語つていく。

二 劣等感と優越感

二

黄金に輝くイチョウ並木を清涼な風が吹き抜ける。風が吹く度に金木犀の香りが周囲に漂う。その香りを胸一杯に吸い込みながら、鹿島は教室で憂鬱な気分に浸っていた。なぜならば、彼の大嫌いな運動会のシーズンが迫っているからだ。

鹿島は勉強こそ出来るものの、体育 というよりは運動 はまったく駄目だった。通信簿に付けられる評価も常に『1』で、周囲に鹿島ほどに運動の出来ない人間は一人しかいなかつた。

その人物とは、同じクラスにいながらも、彼とは一度たりとも話したことがなかつた男子生徒だ。彼の名前は、藤堂博（ふじやま ひろし）といった。クラスの中でも影が薄く、陰気な表情で、いつも一人でいる、まるで空気のよくな存在だつた。

鹿島は、藤堂を見ては優越感に浸つた。僕はあいつよりも運動が出来るから大丈夫。そんなことを考えてはいつも自分を正当化した。そして、下を見続け努力をせずにいた。

ちらりと藤堂の方を見てみると、相変わらず陰気な表情で俯いている。彼もまた、運動会シーズンが嫌いなのだろう。

「今年も運動会が近づいてきました。今からみんなの出場種目を決めます。みんな、全員出場競技以外に、最低一種目は出でてくださいね。それでは、学級委員の人は前に出て司会をしてください」若い女教師の声を受け、学級委員の一人が黒板の前へと立つた。

「じゃあ今から出場種目を決めます。一〇〇メートルは全員出場で

すから、まずは一〇〇メートル走に出たい人は手を上げてください」「男子たちが一齊に手を上げた。一〇〇メートル走というものは運動の出来る者にとつて、最高の活躍の場だ。ここで一等賞を取れば、クラスの英雄になることが約束される。だが、運動の出来ない鹿島にとつては、ただ恥を晒す場でしかなかつた。

「どうせ出るなら、玉入れか、綱引きがいいかな。

玉入れや綱引きは団体種目であるがゆえに、鹿島一人がいくらいスをしても目立たない。それに、運動会までに開催される練習も比較的楽だ。他の種目は厳しい練習が待ち構えている。鹿島は、そんな独り言を言いながら、玉入れの出場選手を決める時を待つた。

学級委員が四〇〇メートル走、騎馬戦、ミニマラソン、と手際よく出場選手を決めていく。時折、出場選手が過多な時には、じゅんけんホイ、といつのような掛け声が聞こえてきた。

そして、ついに鹿島の狙いの一つである玉入れの出場選手を決める時が来た。

「それじゃあ、次は玉入れに出たい人は手を上げてください」

鹿島はすかさず手を上げた。だが、さすがは楽な種目というだけあって、手を上げる人数も少なくはない。出場選手が六人に対して、八人の生徒が手を上げた。その中には藤堂の姿もあつた。

「いち、にい、さん…………八人ですね。それじゃあ、じゃんけんで決めてください」

ぞろぞろと手を上げた生徒が黒板前に集結する。その様子は戦国の合戦のようだ。皆がこの種目を譲るまい、と闘争心をむき出しにしている。ただ一人、藤堂を除いて。

「いくぞ。じゃんけん……ほいっ！」

クラスでも比較的人気のある男子が指揮を取り、合戦が始まられた。さすがに人数が多いだけあって、なかなか決着がつかない。何度もあいこになりながらも、着々と出場者が決まっていった。

そして、最後の勝利者を決めるところまで合戦は進んだ。残るは、女子一人と、鹿島、藤堂の三人だった。　決戦の火ぶたは切つて落とされた。

「じゃんけん……ほいっ！」

チヨキが一人にパーが一人。

合戦は終結した。

勝利者は鹿島……ではなく、一人の女子だった。当然、藤堂も敗北者だ。戦いに勝利した女子は歓喜の叫びをあげている。ただ二人だけがやる瀬無い表情をしている。

「決定ですね。負けた人は席に戻つて、勝った人は黒板に名前を書いてください」

鹿島はとぼとぼと自分の席へ戻つていった。固い木の椅子に座ると、鹿島は大きなため息をした。ため息は幸運を逃がすとは言うが、やめられなかつた。ふと藤堂の方を見てみると、さつきと何ら変わりのない表情で椅子に座つていた。

「それじゃあ、次は綱引きですね。出たい人は手を上げてください」学級委員の一言に、鹿島は息を吹き返した。それは藤堂も例外ではなかつた。鹿島は勢いよく手を上げ、やる気をアピールした。しかし、またも出場人数过多だつた。一度目の合戦の火ぶたが切つて

落とされる。

だが、彼を待っていたものは一度目の敗北だった。今度はあいこの末の決着ではなく、一回目の勝負で敗北を喫した。またも鹿島と藤堂が敗北者となつた。彼の顔から希望の色が消えた。藤堂は、生氣のない顔から、さらに生気が薄れているよう見えた。希望の色など、始めからないのだが。

「それじゃあ、次が最後の種目ですね」

学級委員のその言葉に、鹿島は仰天した。もう最後の種目なのか、と。そして仰天すると同時に、大きな後悔の念にさいなまれた。なぜなら、未だに出席種目の決まっていない彼らが最後の種目に出場することが確定したからだ。さつきも言ったように、一人最低一種目の出場が義務付けられている。

「最後の種目は、クラス対抗リレーですね。一〇〇メートル走のタイムが速い順から選んでいきます」

クラス対抗リレーといえば、運動会の花形だ。一つのクラス選りすぐりの人間が一チームに分かれて出場する。また、クラス対抗リレーは例年運動会の最後に行われており、これがチームの勝敗を決める。そんな重要なポジションに、運動音痴の鹿島と藤堂が立たされてしまった。

学級委員が一人、また一人とタイムが速い順に黒板に記していく。第一チームが三人、第二チームが三人書かれたところで、学級委員は手を止めた。

「ええ」と。鹿島君と藤堂君だけ全員出場種目以外で一つも出場種目が決まっていないので、クラス対抗リレーに出場してもらいます」

鹿島の顔に絶望の色が浮かんだ。クラスの皆から痛々しい視線が送られる。鹿島は涙を溜め、それにじっと耐えた。だが、その我慢も無駄に終わる。

「ええー。最悪だし。なんでこんな遅い奴らと走らなきゃいけないんだよ。これじゃ、俺たちのクラス負けちやうぜ。去年もこいつがいたから負けたんじやん。それに、藤堂君も足遅いし」

クラスで一番足の速い男子の一言だった。その一言で、田の奥に溜めておいた涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。止めようと思つても、悔しさで止まらない。机が涙の模様で飾られていく。教室全体がざわざわと騒ぎ出す。そんななかでも藤堂はいつもと何ら変わらぬ表情でいた。悔しくないのだろうか。

「みんな静かに！」

女性教員が乱れた秩序を正した。教室に、鹿島の泣き声だけが残つた。

「そんなことは言わずに、みんなで協力して頑張つてくださいね。諦めなければ絶対に勝てます。鹿島君、藤堂君、頑張つてくださいね」

女性教員が鹿島の元にやつて来てほほ笑む。そのほほ笑みからは優しさなんて微塵みじんも感じられなかつた。

最後に学級委員が締め、運動会の出場者を決める会は終わつた。

放課後、皆が帰つた後も鹿島は泣き続けた。何で俺がこんな田に合わなくちゃならないんだ、と自分を恨み続けた。夕日が落ちかけた時に、彼は泣きやんだ。薄暗い教室には誰もおらず、鹿島と悲しみだけが教室にいた。

「帰るの……」

鹿島は涙を手でぬぐい、ラングセルを背負つて教室を出て行つた。

外はすっかり夕闇に染まり、鳥が鳴いていた。普段ならば山なり河なりに寄り道をして遊んでいくが、今日はそんな気分ではなかつた。一刻も早く家路について、泣きたかつた。

「ただいま」

精いっぱいの虚勢で帰りの挨拶をする。鹿島は部屋に戻り、ラングセルを置く。そして、ベッドの上に寝転んで、すすり泣いた。枕に顔をうずめて、泣き声が聞こえないようにする。

足が遅いことは罪なのか？ そんなことはありえないはずだ。鹿島には、なぜ自分が責められたのか理解出来なかつた。

思考がぐるぐると回る。憎たらしいあの声が脳の中でリピート再生成される。何度も何度も何度も。その度に鹿島は拳を握りしめ、柔らかいベッドを殴つた。

悔しさと憎しみに震えていふと、階下から母親の呼ぶ声がした。

「俊夫。^{としお} 藤堂君から電話だよ」

一瞬、誰だ、と思った。そして、すぐにあの陰気な表情をしている藤堂博の顔を思い浮かべる。鹿島は、藤堂と一度も話したことがない、ましてや一緒に遊んだことなど一度もない。

一体何の用なんだろ？ そんなことを考えながら階下へと降りて行つた。そして、黒い受話器を手に取つた。

「もしもし」

『鹿島君。あいつらにあんなこと言われて、悔しくないの？』

突然の声に、鹿島は受話器を離す。

初めて聞く藤堂の声は、優しい雰囲気をまとっていた。偽善的な言葉をかける、あの女性教師よりも。

藤堂の突然の言葉に、鹿島は一瞬戸惑つたが、即答した。

「この際、藤堂がどんな人間でも構わなかつた。

「悔しさ。俺だつて出たくて出たわけじゃないのに」

鹿島の目からまた涙がこぼれ落ちた。あの時の悔しさが胸に込み上げてくる。

受話器の向こう側で、藤堂が小さく笑つ。

『じゃあ、あこつらを見返してやるつよ。僕らだつてやれば出来るつてところを見せてやるつよ』

藤堂の言つている意味が分からなかつた。いくら努力をしても、あこつらを見返すことは不可能だと鹿島は思つた。だが、あの時の言葉や気持ちを思い出すと、はらわたが煮え繰り返るような思いに包まれ、鹿島はこつ答えた。

「いいよ、やつてやるよー。」

また、受話器の向こう側で藤堂が笑う。

『よーし、決定だね』

「でも、急に何で？」

『そりやあ、僕も悔しいからだよ。バカにされて嬉しい人間はあまりいないと思うけど？ それに、一緒に頑張る相手がいた方が身も入るしね。だから鹿島君を誘つたんだ』

「ふうん。それで、いつから、何をするの？」

『明日から一人で特訓をしよう。内容は全部僕が決めておくから、鹿島君は気にしなくてもいいよ。放課後に学校の近くにある河原に丁度良い場所があるから、そこまでやるつもり』

「うん、分かった」

『それじゃあ、また明日学校で』

藤堂はそう言い残すと電話を切つた。

藤堂の声は終始落ち着いたものだつた。あれだけ蔑まれたにも関わらず、そんなことは歯^{しが}牙にもかけない様子だつた。藤堂はあんなに強い奴だつたのか、と鹿島は考えを改めた。うかうかしていれば藤堂に負ける。そんな思いを秘めて鹿島も受話器を置いた。

そして、彼ら一人の秘密の特訓が始まったのである。

三 スタートライン

三

運動場に笛の音が響く。笛が一度鳴る度に、四人の男子と女子が一斉に構えを取り、ピストルの音が鳴ると、彼らは一斉に駆けていく。その笛の音が耳に入る度、鹿島の心臓は高鳴った。そして、鹿島の走る順番がきた。

「位置について。よーい……」

鹿島を含む四人が一斉にクラウチングスタートの構えをとる。

これが運動会での基本だ。

他にスタンディングスタートがあるが、これは運動会では使われない。使うものといえば、下級生の100メートル走か、リレーの第二走者以降だ。

今日の体育は、運動会が近いということで走行練習にあてられている。

「はあん、とスタート一ピストルの音が鳴り響く。
スタート一ピストルから白い煙が噴出される。

鹿島は一生懸命にグラウンドを駆けた。

だが、その必死な姿を横目で見ながら、クラス対抗リレーに選抜された男子が颯爽^{さつそう}と彼を抜き去つていいく。鹿島は、自分が抜き去られる寸前に男子の顔がにやけていることに気付いた。鹿島は思いつきり歯を食いしばる。悔しくて、悔しくて仕方がない。そして、彼に追い打ちをかけるかのように他の男子生徒も彼を抜き去つていく。

彼らの姿が、どんどんと遠くなる。まるで蜃氣楼のようだ。

鹿島が「ゴールに到着すると、一緒に走っていた男子が笑いながらこちらを見ていた。

「トシ。お前本当に走るの遅いな」

颯爽と抜き去つていった男子が汗を拭いている。

鹿島は、俊夫という名前の『俊』という部分を取つてトシと呼ばれている。鹿島は、『歳』と言われているようであまり良い気はしていない。

鹿島は息を切らしながらこいつ答えた。

「俺だつて一生懸命なんだよ」

「そうかあ。せいぜい頑張つて走つてよ」

この男子は、決して鹿島が嫌いでこのようないふを言つてはいるわけではない。鹿島は、運動こそ出来ないものの、クラス全体からの人気はかなりあつた。だが、いつも運動会シーズンにだけ、いじめにも似た待遇を受ける。

鹿島は黙つてスタート地点に向かつて歩き出した。

途中、正面に田をやると藤堂がクラウチングスタートの構えをとつていた。そして、スタートーピストルの音が響くと、それと同時に藤堂は転んでしまつた。藤堂は涙目になりながらも一生懸命走つていた。彼の膝は赤く擦りむけていた。

藤堂がゴールしても、周囲から何の反応もなかつた。藤堂はただ黙つて、元の位置へと戻る。

藤堂は、クラスでは背景同然の扱いになつてゐる。いてもいなく

ても何の関係もない。いじめの対象にすらならない。事実、彼は今日学校に来てからというもの誰とも挨拶すら交わしていない。

鹿島は、うつむいて歩いている藤堂に寄り添つていった。

「なあ、さつき転んでたけど大丈夫かよ」

「うん。ありがとう、大丈夫だよ」

藤堂が必死に涙をこらえているのがよく分かつた。

やはり、藤堂は根が強い奴なのだと鹿島は確信した。と言つても、鹿島たちは小学六年生だ。ある程度の自制は出来て当然のことである。だが、それを除いても藤堂は立派な人間だ。これ程までの完全な黙殺に耐えるということは、常人が可能なことではない。常人であれば、気が変になつてしまふか、それこそ不登校にでもなつてしまつだろ？。何が藤堂を強くしているのか、鹿島は理解できない。

鹿島と藤堂がスタート地点に戻ると、高らかな笛の音が、まき上がる砂埃を裂いて運動場中に鳴り響いた。鹿島が校舎に設置されている時計を見てみると、授業終了まで後一分というところだった。

「はい。今日の授業は全部終わり！ 教室には戻らず、ここで終わりの会をしましょ？」

担任は宿題の話や、保護者に伝えておくべきことなどを端的に生徒に話した。

「それでは運動会まで後一ヶ月です。皆さん頑張つて練習をしてください。さよなら」

担任の一言を受け、生徒たちは一斉に散つていった。

ただ、鹿島と藤堂を運動場に残して。

鹿島は、ずっと藤堂の赤く擦りむいた膝を見ていた。膝から滴る血は、とても痛々しく、鹿島の心を同じように痛々しくした。友達と言えるかどうかはさておき、人が傷ついているのにも関わらず、クラスメイトは誰一人として藤堂の心配をしなかった。

「なあ。その膝、大丈夫なのかよ」

「ちょっと擦りむいただけだからね。大丈夫だよ」

「嘘つくなよ。お前、さつきから泣きそつじゃないか」

鹿島は藤堂の表情の変化を見逃さなかつた。転んだ直後は泣きそつな表情だつたが、今はもう泣いているのと同じような表情をしている。目尻から涙がこぼれ落ちそくなつていて。傷の痛さと、周囲の冷たさが合わさり、痛烈なものとなつていてのだろう。

「そんなことないよ」

「つむさい。保健室へ行くぞ」

鹿島はぶつきらぼうに言い捨て、それでも保健室に行くことをためらう藤堂に、さらに言つた。

「今日の放課後から特訓を始めるんだろ？ それなのに初日からそんなことでじうするんだよ。怪我はしつかり治さないと」

鹿島は藤堂の手を強引に引っ張つて保健室へと連れて行つた。こうなしか、藤堂の表情は柔らかくなり、嬉しそうな雰囲気を感じさせた。

保健室へと行くと、とても保健室の先生とは思えないほど厳つい顔つきをした男が、長い髪を眼前に垂らして本を読んでいた。男の読んでいる本は芥川龍之介の『羅生門』だ。男は、誰がそう呼び始めたのかは知らないが『怪物黒田』と呼ばれている。

「黒田先生。こいつが怪我したんで、治してやつてくれませんか」

鹿島が声をかけると、黒田は野太い声で返事をして藤堂の方へと歩み寄つていく。藤堂は黒田に怯えているらしく、蚊の鳴くような声で大丈夫だから、と言つて保健室から出てこいつとしていた。これは、この学校の生徒なら誰もが通る道だといふことを、鹿島は知つていた。

黒田は藤堂のすぐ前で立ち止まり、傷を眺める。そして、黙つて傷口を水の染み込ませたガーゼで拭きとり、次にオキシドールを別のガーゼに染み込ませて傷口にあてた。

「いてつ

藤堂は黒田に聞こえないように小さな声で言つたつもりでいたが、黒田の耳にはしつかりと届いていた。

黒田の鋭い眼光が藤堂に浴びせられる。

藤堂は怒られる、と思ったのだが黒田からの言葉は予想以上に優しかつた。男なら我慢しろ、というような過去の遺物と化した言葉は発せられなかつた。

「男でも、痛いもんは仕方ないよな。泣きたければ、泣いても良いんだぞ?」

黒田は、仕上げに傷口に絆創膏^{はんそうがい}を一枚貼り付けた。

「これで大丈夫だ。それにしても盛大に転んだようだな

黒田の姿勢のイメージからは考えられないほど優しさに満ちた笑い声をあげる。人は見かけによらぬ、という言葉が黒田にはよく似合つ。しかし、そんなことは鹿島と藤堂以外は誰も知らぬだろう。

何せ、黒田の容姿に怯えて、誰もこの保健室を利用しないのだから。

「そりなんだよ。」いつスタートした瞬間に転んだんだぜ」

鹿島も黒田と一緒に笑った。藤堂は一人顔を紅潮させている。

「君、名前は？」

黒田の言葉にびっくりと肩を上下させた。優しい、と分かったはいものの、未だに黒田の厳つい容姿に慣れない様子だ。

「藤堂です」

黒田は首を縦に振った。

「藤堂君。男だからって泣いちゃいけないとか、男らしくしていいといけないだなんてことはないんだよ。自分に正直にならなくちゃ。もつとも、我慢しなきゃいけないことも沢山あるけどな」

黒田は、さつきよりも大きな声で笑い始めた。藤堂はとまどいの色を隠せずにいた。男は男らしくなればならない、それは当然のことだと思っていたようだ。

藤堂が黒田の言葉に戸惑つていると、鹿島が笑いながら彼の背中を三度叩いた。それに合わせて藤堂の体が前後に揺れる。

「いつまで怖がってんだよ。良い先生だろ？」

「え、ああ、うん」

藤堂の態度はいつまでも煮え切らなかつたが、鹿島はそれで満足だつた。

二人は、一通り黒田と雑談をした後に教室へと戻り、着替えを済ませた。藤堂は青い短パンにシャツ一枚という簡単な服装だ。特訓をする」とに差支えはなさそうだ。

「じゃあ、河原へ行こうよ。鹿島君」

藤堂は小学生にしては珍しい青いランドセルを背負っている。青いランドセルには、鹿島のいる小学校のものではない校章が張り付けられている。

「張り切つていいのか」

そうして、二人は小学生らしい元気な姿で教室を後にした。

向かう先は小学校近くにある河原だ。そこには陸上競技場などにも似たトラックが用意されている。

一人が河原に辿りつく頃には太陽が橙色だいだいに染まり、川もまた同じ色に染められていた。川原で遊んでいたのであるうす供たちが帰つていいく姿がちらほら見られる。

余談ではあるが、鹿島の家の門限は五時である。が、特訓をするんだと母親に言つと、すんなり門限はなくなつた。ただ、遅くなり過ぎないように、と言わただけだった。藤堂の家庭のことは分からぬが、鹿島はこれで心おきなく特訓に励むことが出来るようになつた。

一人は川原に備えられているベンチにランドセルを置き、手際良く準備体操を済ませた。体操の最中に周りを見てみると、ランニング中の男や、犬の散歩をしている女性など、様々な人間が日常生活を営んでいる様子がうかがえる。

「よし、準備完了だ。それで、練習は何をする？」

「鹿島君、ちょっと待つてね」

藤堂はランドセルの置いてある所まで走っていき、ランドセルの中から一枚の紙切れを取りだした。そして、それをじっくりと眺めた後にして言つた。

「まずは、軽くジョギングかな」

「軽くつて言つと？」

「んー、一キロくらいかな」

その言葉に、鹿島は硬直した。一キロといつと、鹿島の通つている小学校のマラソン大会の距離の半分だ。大人の目で見れば大したことのない距離だが、子供の目から見れば相当な距離なのだ。鹿島のような運動音痴の人間には、たつた一キロがフルマラソンのように感じられるだろう。少々大げさだが。

鹿島はしばらぐの間ためらつていたが、決意を固めた。

「分かったよ。やるよ」

「そうこなくちや。えーと、ここから一キロだから……。ここ」の直線を十往復だね」

藤堂はゴール地点を指差した。彼らの目の前に伸びる道は、直線で丁度一〇〇メートルだ。彼の瞳には迷いはなさそうだ。絶対にリレーで勝ちたい、そんな意志の強さを感じさせる。

鹿島は靴ひもを固く縛りなおして、藤堂と一緒にゆっくりと駆けだした。

静かな川原に少年の駆ける音がじだまする。

静かに、着実に、息を少しづつ乱しながら駆けていく。

「一ースを折り返し、また同じ一ースを走る。

そしてまた静かに、着実に駆ける。

「はい、終わり」

藤堂はけろりとした顔で鹿島を見つめた。どうやら、藤堂には鹿島が思っていた以上の体力が備わっていたようだ。

鹿島は息を切らし、何も話すことが出来ない。ただ、荒い息づかいを放つだけだった。

そんな鹿島の姿を見て、藤堂は心配そうに語りかけた。

「大丈夫？ ちょっと休む？」

「なんで、そんなに体力があるんだよ」「えええ言いながら鹿島が問う。

「実はね、ちょっと前から走り込んでたんだ。もちろん運動会の為にね」

「じゃあ、クラス対抗リレーに登場することも……」

「それはさすがに予想してなかつたよ」

藤堂は明るい笑顔を鹿島に見せる。夕日が後光のよつて輝く。

「ちょっと、休憩させて」

鹿島はランデセルが置いてあるベンチまでよろよろと歩いて行き、座ることの出来る範囲まで近寄ると、力なく崩れた。自分にはまったく体力がない、と痛感させられた。鹿島はしばらくうだれました。

ふと鹿島が顔を上げると、藤堂が横に座っていた。さつき見ていたメモをじっくりと眺めている。

「さつきから気になつてたけど、それなんなの？」

「これ？ これはね、図書館で調べた練習メニューを書いたメモさ

「用意周到だなあ」

「もちろんだよ。僕は絶対に勝ちたいんだから。もつ今年で卒業だからね。それに……」

川原の近くを走る電車で、藤堂の言葉がかき消された。鹿島はそれを聞きなおそうかと思ったが、それどころではなかつた。

一人のつややかな髪が風に揺れる。

「よし、俺だつて負けてられないぞ」

鹿島は両手で太ももを叩き、一気に立ち上がつた。その後、自分の頬を一度平手で打つた。頬がきゅっと引き締まる。

「お相撲さんみたいだね」

藤堂はそう言つと、くすくすと笑い始めた。鹿島もそれにつられて笑つた。さつき引き締めたばかりの頬が緩む。

「俺、運動の努力は嫌いだつたけど、こんなのなら好きかな。こうやって笑いながらやるなら、問題ないよ。なんだか運動が好きになつてきた」

「あはは。じゃあ次のメニューにいこつか」

「よおし、準備万端だぞ」

「次はさつきのコースを全力で五回走るよ。その時、タイムが一十秒を上回つたらもう一本追加で」

鹿島はさつきの言葉を撤回した。

やはり運動なんて嫌いだと。

鹿島がゆつくつと語つていると、さつきまで快晴だつた空はどんよりと曇り始めていた。一雨きそつである。だが、そんなことに気が付く由もなく、鹿島は一つ息をついた。

「これが特訓一回目ですね」

鹿島はもうとっくに冷え切つた茶を一口すすつた。茶の苦い味が口内に広がつていぐ。

「面白い話ですね。実は陰で努力をしていたとは」

「いや、まったくです。それを聞いた時は本当に驚きましたね。いつも運動が出来ない、出来ないと思っていたのに。本当は私よりも出来る人間だつたのですから。おつと、少し失礼」

鹿島はもぞもぞと鞄を漁り始めた。

「タバコですか？」

鹿島は首を横に振る。

「飴玉ですよ。一つ食べてもよろしいでしょうか？　どうも口の中が寂しくて」

「どうぞ。ああ、良ければ私にも一ついただけませんか？」

「どうぞ、と鹿島は一言言い、飴玉を手渡した。そして、ほぼ一人同時に口に放り込んだ。

「おや、なんだか食べたことのある味ですね。何でしたっけ」

「どんぐりアメというものです。噛めばガムにもなります。小さい頃流行りませんでしたか？」

「ええ、確かに流行りましたね。当時はこんな駄菓子がご馳走でしたからね。それにしても、今時よく見つけましたね」

がりつ、という音が部屋に響く。短髪の男は早々と飴を噛み碎いてガムにしたようだ。

「近くにまだ売っている場所がありましてね。大量に買い込んでおきました。次はいつ発見できるか分かりませんし。さて、続きをお話しでしょうか。特訓一日目です。これがまたみつともなく……」

鹿島は再び語り始める。

四 夕陽と友情

四

まばゆい陽光が部屋を照らす。小鳥がさえずり、新しい希望に満ち溢れる黎明の時。清々しい朝だ。時折香る金木犀の香りが心地好い。

そんな素晴らしい朝。涙の染み込んだベッドの上で鹿島は目を覚ました。が、鹿島は寝転がつたままで、体を一つも動かさない。いや、動かすことが出来ないのだ。激しい運動の翌日に現れる、あの症状だ。そう、筋肉痛である。

普段から運動することのない鹿島だ。こうなることは予想していた。だが、ここまで激しい筋肉痛に襲われることは彼も予想していなかつた。藤堂の作る特訓メニューがあそこまで厳しいものとは思つていなかつたのだ。

鹿島はあれから、100メートルを十三本走られた。多めに取られているハ本はペナルティだ。最後は死に物狂いで走り、からうじて十九秒を記録した。藤堂はまだ一緒に練習を続けたい様子であったが、その日はそれから入念にストレッチを行い、先に帰宅した。藤堂は川原に残つて、特訓を続けたのだろう。

「俊夫。もう六時半だよ。いい加減起きなさい」

階下から母親の声がする。鹿島はゆっくりと上体を起こし、さらによっくりと立ち上がった。からうじて歩けそつではあるが、とてもではないが特訓など出来ない。今日の体育は見学させてもらおう。

鹿島はそう決意した。

鹿島は階下に降り、母親に事情を説明した。母親は一つため息をついて、連絡帳へと見学する印むねを記した。最後にハンコを押し、鹿島へと返した。鹿島は、またぎこちない足取りで階上へと登り、学校へ行く準備をする。

縦じま模様のパジャマを脱ぎ捨て、動きやすい白のTシャツに、五分丈のジーンズを着用した。髪型はいつもどおりボサボサだ。ボサボサの髪を黄色い帽子で抑え込み、黒のランドセルに授業で使う教科書を詰め込み、またゆっくりと階下へと降りた。そして、「いつてきます」と母親に一言言つてから家を出た。

空は日に痛いほどに青く、太陽光が目を刺激する。鹿島は目を細めて空を眺め、考えた。

あいつ、大丈夫かな？

もちろん『あいつ』といつのは藤堂のことだ。

自分が帰つてから、どれ程の練習をしたのだらう。そんなことを考えると、心配になつてくる。練習をしそぎて、本番で体を壊してしまつては元も子もないからだ。

鹿島は龜のような歩みで学校を指した。普段であれば二十分程度という簡単な道のりであるが、今日はその簡単な道のりが山のようにそびえたつ。これも少々大げさな表現である。

「おはよー、……」

鹿島が教室に辿りつく頃には、遅刻寸前の時刻であった。クラス

の男子が鹿島のぎこちない歩き方を見て笑っている。その中の一人が鹿島の方に歩み寄り、話しかけた。

「ははは。おいおい、どうしたんだよ。無駄な努力をまたしてるのか？ それならやめとけよ。お前じゃ他のクラスの奴らには勝てない。いくら練習したって無駄だよ。お前は黙つて棄権しろ。そうすれば他の奴が代わりに走るだろ」

その男子はひとしきり鹿島を侮辱してから自分の席へと戻つていった。鹿島の皿にうつすらと涙が浮かぶ。絶対に見返してやり、という闘志がじりじりと燃え始めた。

涙を抑え、自分の席へと座つた鹿島は、教室を見回し、藤堂が登校していることを確認した。相変わらず、うつむいたまま、微動だにしない。昨日の活発な藤堂の姿がまやかしのように感じられる。あの意気込みはどこから来て、どこへ消えたのだろうか。

そんなことを不思議に思つていると、担任がやつてきた。

今日も一日、憂鬱な授業が展開される。

スターテーピストルの爆発音が運動場を覆つ。今日も運動会の練習だ。今日から、種目別に練習を行つてゐる。鹿島と藤堂はクラス対抗リレーのチームの元へと向かう。藤堂は体操服、鹿島は見学のため私服だ。

チームのリーダーにバトンが手渡されると、練習は速やかに開始された。鹿島の所属するチームと、藤堂の所属するチームとで、練習試合を行うようだ。鹿島のチームはメンバーが一人足りないので、一〇〇メートル走の選手の中から適当に一人を選んで、メンバーに加えた。適当と言つても、もちろん鹿島よりは足が速い。

メンバーが所定の位置に着くと、鹿島のチームのリーダーが大き

な声で叫つ。

「行くぞー。よーい。ドンー！」

その声でレーンにいる二人が一斉に走り始める。実力は五分と五分。カーブを曲がり切つても差は変化しない。勢いよく砂が舞い散る。二人の男が風を切る。

運動場を半周走つたところで、次の選手へとバトンが受け渡された。バトンの受け渡しはぎこちなく、とても上手いとは言えない。とはいへ、小学生のリレーとはこのようなものだ。個々の能力が重要だと思って、バトンの受け渡しというものをあらそかにする。もちろん、陸上競技に精通している小学生は別だ。彼らは大人も顔負けのバトンの受け渡しを行う。

第一走者がまた半周走ると、また次の選手へとバトンが受け渡された。次の走者には、藤堂が控えている。鹿島も、その場にいれば第四走者、つまりアンカーだ。藤堂は表情を一つも変えずに第三走者が来るのを待つている。そして、藤堂にバトンが手渡された。現在、藤堂のチームがわずかにリードしている。後は逃げ切るだけだ。練習とはいえ、手に汗握る。

藤堂は勢い良く駆けだした。あまり早くはないが、春に計測された時よりかは早くなつていた。と思つ。鹿島はその姿を、息を呑んで見つめた。

しかし、その勢いが空振りしたのか、カーブを曲がる際に転んでしまつた。

遠心力で藤堂の体はレーンから外れ、運動場の砂が彼の体を擦つた。鹿島は立ち上がり、藤堂の元へ行こうとした。が、藤堂の立ち上がる姿を見て、思い直した。

藤堂がゴールする頃には、鹿島のチームはとつて「ゴールしていい。藤堂のチームの完敗だ。周囲のメンバーから冷ややかな視線が藤堂に向かって浴びせられる。藤堂はその視線を黙つてシャワーのよに浴びている。

それを見ていた鹿島は思わず身震いをした。もし自分があのよになつてしまつたら、同じような冷ややかな視線が浴びせられるだろ。心の隅で、あれが俺でなくて良かった、ということを考えた。だが、その考えを蹴り飛ばして、鹿島は藤堂の元へ向かった。そして、激励の言葉を贈つた。周囲のメンバーはそれを鬱陶しそうに見ていたが、鹿島は気にしなかつた。

「先生！ 藤堂君が怪我をしたので、保健室に行つてきます

鹿島は担任にそう告げると、一人はお互にぎこちない足取りで保健室へと向かった。クラス対抗リレーの練習はまだ行われている。「やつといなくなつた」

そんな心ない言葉が運動場で小さく囁かれた。

「黒田先生。こいつ、また転んだんだ。治してやつてよ」

昨日と同じように本を読む黒田に、鹿島は物怖じせずに言つ。黒田の読んでいる本は変わつていて、夏田漱石の『吾輩は猫である』になつてゐる。文学小説が好きなようだ。

「お、またか

黒田は本にしおりを挟んで、昨日と同じ手順で傷口を手当した。藤堂が今回擦りむいたのは左足だ。見事に昨日とは違う箇所を怪我したのだ。

「怪我は男の勲章だな。何か必死にやつてるな、」
「これくらいの怪我はしないとな」

医療用具の入った箱を閉じ、黒田は元の位置へと座つた。そして、鹿島の方へと視線を向けた。何か言いたげな目だ。

「な、何ですか？ 黒田先生」

「お前も、足が痛いんだろ」

「そんなわけないじゃないですか。僕はすくべ元気だよ」

鹿島はその場でぴょんぴょんと跳ねてみる。が、歩く「」とがやつとの筋肉痛だ。その衝撃は尋常ではない。電撃のような痛さが鹿島の体を貫く。あまりの痛さに、鹿島は顔をゆがめた。黒田はそれを見落とさなかつた。

「なるほど、筋肉痛か。我慢していいのかなるものじやないぞ。ほら、」
「じつへ來い。また同じことを繰り返す氣か？」
「お前は去年も……」

「やめてよ、黒田先生。昔の話はどうでもいいよ」

鹿島は黒田の言葉を遮り、少し声を荒げて言つた。そして、黒田の前の丸椅子に座つた。藤堂は鹿島の姿を怪訝けげんそうに見つめていた。鹿島の太ももに黒田の手が当たられる。ゆっくりと黒田の指が鹿島の太ももに沈む。それに伴つて、金づちで叩かれたかのような鈍い痛みが走る。痛みが生じる度に、鹿島は顔を歪めた。

「ここは痛むか？」

「はい」

黒田は太ももから手を離し、湿布を貼り付けた。ハッカのような清涼な臭いが鼻をつく。

「お前、昨日藤堂君にも言つただる。男だからと言つて、我慢することなんてないんだ。痛ければ痛いつて、そう言えばいい。もしされを格好悪いなんて思うなら、そんな安いプライドは捨ててしまえ」

鹿島は黒田から顔をそむけ、小さく頬を膨らませた。彼のその表情からは、何も分かつていなくて、といつような意味を読み取ることが出来る。また、今度こそは絶対に負けられないんだ、という鹿島の闘志もその表情には表れていた。

チャイムが鳴る。

チャイムの音が静寂に包まれた保健室をさらに包む。四時間目の終わりを告げるチャイムだ。黒田は鼻で息を吐き出し優しく呟いた。

「ほら、お前らの好きな給食の時間だ。飯食つて、嫌なことなんて忘れちまえ。そ、俺も飯を食つんだ。行つた行つた」

その一人のやり取りを、藤堂は心配そうに見つめていた。

一人が保健室を出ると、唐突に藤堂が話し始めた。
「ちょっと僕、用事があるから。先に教室に帰つてて」

「用事?」

「うん。すぐ終わるんだけどね」

「じゃあ俺も一緒に……」

「いいから。じゃあ、また後でね」

藤堂はそう言い残すと、足早にどこかへ去つて行つた。

「どうこいつ」となのだろう、と鹿島は少し疑問に思つたが、腹の虫が鳴ると藤堂のことは一の次になつた。それに、藤堂の目からは嘘をついてくるような雰囲気は感じられなかつた。いつもどおりに無

表情で、こつむどおりに平淡な声だった。

教室に戻ると、既に給食の配膳が行われていた。今日の献立はコッペパンが二つに、マーガリン、ポタージュ、サラダ、それに牛乳といつものだつた。今日の献立は割と質素だ。鹿島は素早く列に並び、それらを受け取つた。

給食の乗つたトレイを持つて着席し、あたりを見回すと、藤堂の席以外にいくつか空白が出来ていた。トレイにでも行つているのだろうか。給食の時間に遅れる人間など、滅多にいない。

しばらくすると、藤堂以外の男子が帰つてきた。手をハンカチで拭いている。どうやら鹿島の予想通り、トレイにでも行つていたようだ。男子たちが手を拭いているのを見て、今週は『手洗い強化週間』だということを鹿島は思い出した。

学級委員が黒板の前に立ち、音頭を取る。

「いただきます！」

一斉に皆が食事を取り始める。未だに藤堂は帰つてこない。コッペパンにマーガリンを塗り、一口かじつた。鹿島の視線の先は、教室の扉を向いている。

「トシ。どうかしたか？」

隣に座っている男子が話しかけてくる。藤堂がいないことなど、気付いてもいない様子だ。

「いやさ、藤堂君がいないな、つて思つてさ」

「藤堂君？　ああ、あの子か。転校してきた時から一度しか話したことがないなあ。友達？」

「うん、まあそんなものだよ」

「ふーん。僕にはあんまり良い子に見えないよ。だつていつも暗いし、勉強は出来るけど……。何考てるか分からぬから、怖いん

だよね。何かされないよう気に気を付けなよ?」

そんなものかな、と鹿島は思った。

不思議だった。藤堂がこの小学校に引っ越してきた時（その時は小学六年の春だった）は、みんなが彼に質問攻めをした。だが、一週間が経過したあたりから、まるで彼は最初からいなかつたような扱いになつた。誰も彼に近寄らなくなつたのだ。と言つても、彼から近寄るようなこともなかつたのだが。

誰も近寄らない原因は考えられないこともなかつた。一週間という短期間で露呈された小学生らしからぬ態度に、突飛した思考、それに近寄りがたい雰囲気。何を考えているか分からぬ表情。それらがみんなを遠ざけていたのだろう。得体のしれないものには関わろうとしないのが人間というものだ。クラスメイトの藤堂に対する態度は当然のことなのかもしれない。

「コッペパンを一つ食べ終え、次のパンにマーガリンを塗ろうとする」と、教室の扉が軋みながら開いた。藤堂だ。顔が微かに濡れており、短い髪からは微かに水滴が滴り落ちている。顔でも洗つてきたのだろう。鹿島は特に気に留めることもなく、パンを咀嚼^{そしゃく}した。そして、それをポタージュで流し込み、胃を落ち着けた。

そして、何の代わり映えもしない授業が再開される、

担任の終礼が済むと、皆一斉に教室を飛び出した。堅苦しい規律という鎖に縛られた子供たちは、放課後という時に解き放たれ、自由に羽ばたく鳥になる。最近は、いささかその鎖の強度が高すぎたり、自由に羽ばたきすぎている子供がいるようだが。

夕焼けが教室を赤く染めている。最近、徐々に夜が早くなつてき

ている。冬が近づいてきている証拠だろう。すでに鳥たちは巣に帰つたらしく、教室は怖いほどに静かだった。

その静かな教室に残っていたのは、鹿島と藤堂だった。

「これ、何なんだよ」

鹿島が怒りに顔を染めて藤堂に詰め寄る。鹿島がこれほどまでに感情を表に出すことは珍しい。

「何でもないよ。ただ打つただけだよ」

「嘘つくなよ。俺はずっとお前を見てたんだ。今田はどうにも顔をぶつけなかつた」

黙り込んだまま、藤堂は顔を下に向けた。藤堂の顔には紫色の斑点が浮かび上がっていた。その斑点は見るだけで痛々しく、人の心をえぐる。

給食の時間には見られなかつた斑点だつた。しかし、五時間目が終わつたあたりから、徐々に青じんできていた。鹿島はそれを見逃さなかつた。藤堂は今日一日、転びはしたが、どこにも顔はぶつけていない。鹿島が目を離したときにぶつけたのなら、給食の時間以外には考えられなかつた。しかし、ただぶつけるといふことも考えられない。残された可能性は、誰かに殴られたというものである。

「誰にやられたんだよ」

藤堂は何も応えない。黙つて下を向いている。

「あいつらか？お前らのチームの奴らか。黙つてたら何も分からぬだろー。言えよ。あいつら殴つてでも謝らせてやる」

「違うよ」

蚊の鳴くような声で藤堂が声を発した。

「僕が、僕の足が遅いから駄目なんだよ。最初から、リレーなんて嫌だつて言えば良かつたんだ。それなのに僕は何も言わないで……。

だから僕が悪いんだよ。殴られたって当然なんだ。もう、僕は当たり前
に棄権しようと思う。夢を見すぎたんだ。努力をすれば勝てるって、
夢を見すぎていたんだ。もう特訓はやめるよ……

やつぱり、と鹿島は思った。

藤堂は給食の時間、自分のチームメンバーに呼び出され、棄権を
迫られたのだ。おそれらしく、藤堂は断固拒否したのだろう。その結果、
殴られたのだ。男子たちが帰ってきた時、手を洗つたのも、その時
についた血を洗い流すためだろう。藤堂が濡れて帰ってきたのも、
同じ理由のはずだ。

「お前だけじゃないぞ」

「え?」

「俺だつて、殴られこそしてないけど、棄権しろって言われた。で
も俺は特訓をやめる気なんてないぞ。絶対にあいつらを見返してや
るんだ」

右手の拳を握り、真っ直ぐに机へと振り下ろした。拳に伝わる痛
みが鹿島の背筋を伸ばさせた。

「そうだよね。やつぱり、見返してやらないきや黙日だよね。もう、
僕はまた……」

藤堂はほろりと涙を流した。しかし、はつとして右手の甲で涙を
ぬぐつた。鹿島も、必死で泣きたい気持ちを抑えていた。チームメ
ンバーが憎くて仕方がなかつた。出来ることならば顔を思いつき
殴つて、土下座して謝らせたかつた。だが、力で解決することは無
意味だ。だからこそ、運動会という大舞台で度肝を抜いてやるうと
考えた。

「『めんね、鹿島君。僕から特訓に誘つたのに。急にやめるなんて
言つちやつて。これからも頑張ろうね

「もううん」

「じゃあ、今からまた川原に……」

藤堂がその次の言葉を紡いだとした時、鹿島が言葉の糸を断ち切つて言った。

「ごめん……早速で悪いんだけど」

「え、何?」

「筋肉痛で歩くことが精一杯なんだ」

ああそうだった、と藤堂は笑い、一人はそのまま帰宅した。赤い夕焼けが二人の顔を紅に染めた。二人の顔は照れているのか、そうでないのか、夕焼けのせいでよく分からない。鹿島はその日、初めて男と手をつないだ。友情の証である。

ビルの窓に、小さな水滴が付着している。どうやら軽い雨が降り出したようだ。鹿島は傘を持っていない。

「ああ、雨が降ってきましたね」

短髪の男が髪を撫でながら言つ。鹿島はその男の言葉で初めて雨が降っているということに気がついた。ふと壁に掛けられた時計を見てみると、十一時を少し過ぎたところだった。今も時計の針がゆっくりと動いている。力チカチと時を奏でる音が心地好い。

「参りましたね。私は傘を持ってきてないんです。それに、もうこんな時間になつてしまつて。まだ続きはありますが、会社に戻らな

「いと……」

「そんなことはいいでしょう。商談が長引いた。ただそれだけ言えば十分ですよ。私はあなたの話の続きが気になつて仕方がないのです。それに、通り雨かもしれません。じき止みますよ」

「はあ……」

「さあ、早く続きを聞かせてください。これからあなたが、その友達とどうなつたのか」

「まだ少し長くなりますよ？」

「構いませんとも。久しぶりに私も思い出に漫ることの出来るような話を聞いているのです。私にも、あなたと同じような友達がいましたからね」

会議室の扉が開いた。どうやら、お茶を淹れに来ててくれたようだ。急須から暖かいお茶が注がれていく。香ばしい茶の香りが会議室に満ちる。良い空間だ。

「分かりました。話を続けましょう。私が筋肉痛を解消したあたりから話しましようか。そうですね……そうだ、あの時も今と同じ小雨が降っていたんです。まだ十月というのに肌寒かったのを今でも覚えています」

五 怪物黒田

五

特訓の開始から一週間と少しが経過した。鹿島の筋肉痛は黒田の治療の甲斐もあって、三日で完治した。今ではいくら飛び跳ねても、全力で駆けても痛みはない。筋肉痛が完治してからというもの、鹿島は今までの分を取り戻すかのように特訓に励んだ。

一人が河原でランニングをしていると、ぱらぱらと雨が降り始めた。大粒な雨ではなく、霧のよつたな雨、霧雨だった。細かい水が体に付着して、とても気持ちが悪い。持参していたタオルも、すっかり湿気を吸つてしまつて使い物にならない。

「降ってきたね」

灰色一色に染められた空を見上げ、藤堂が言つた。それにつられて鹿島も空を見上げる。霧雨が田の中に入つた。鹿島は田を瞬いた。

「本当だな。でもこれくらいの雨ならなんてことないさ」

鹿島は体育で使う帽子を被つた。せめてもの雨よけだ。

二人は雨などものともせずに走り続けた。

河原はまだ夕方だといつのに薄暗く、俗な言い方をすれば『何か出そうな雰囲気』であった。いつもこのくらいの時間に犬の散歩に来る女性も、ランニングをしている中年の男性も、今日は見当たらぬ。河原には、まぎれもなく鹿島と藤堂の一人しか存在していかつた。まるで河原だけが異世界に飛ばされてしまったかのような錯覚を受ける。

「よし、次は一〇〇メートルダッシュだよ」

「来い！」

藤堂の言葉に返事する鹿島は、一週間前の鹿島とは思えないほど生気に満ちていた。少なくとも、以前よりかは走ることが出来るようになっていたし、着実に体力も増していた。もちろん、この力の源泉は『勝ちたい』という意志だ。

藤堂がゴール地点に立ち、ストップウォッチを構える。そして、右手が大きく振り降ろされた。これがスタートの合図だ。

その合図と同時に、鹿島は駆けた。雨にぬれて路面が滑りやすくなっているが、鹿島は転ばなかつた。霧雨を切り裂き、鹿島がゴール地点を全力で目指す。両腕と両脚が汽車のパドルのように素早く動く。ゴールに引かれた白いラインはもうすぐそこだ。鹿島の胸がラインを超す。

「十七秒！ 淫いよ鹿島君。前はずっとギリギリ十九秒だったのに。特訓の成果が出ていたみたいだね」

鹿島は息を切らしていない。着実に進歩している。

「まだ一本目だろ？ それに十七秒じゃあいつらには勝てないよ。せめて後一秒は短縮しないと。僕は人一倍頑張つて人並みなんだ。次行くぞ！ 次！」

スタート地点まで足早に戻つた鹿島は、左手を上げて準備完了の合図を出した。藤堂もそれに応え、右手を振り下ろした。ストップウォッチが時を刻み始める。

また鹿島が霧雨を切り裂いて駆ける。不思議と体が思つように動く。鉛のように重かつた体では、もうない。

「十七・七秒！ ちょっと遅くなつてるよ。まだまだ頑張つて！」

「当たり前だ！」

その後、鹿島は三本、一〇〇メートルを全力で走つた。そう、一度五本で收まつたのだ。ペナルティは一本もない。

「はあ……どうだ！ やつたぞ」

大きく体を上下させて、肩で息をする。

「やつたね！ 初めてじゃないか。五本全部二十秒を切るなんて」
緊張の糸が切れた鹿島は、濡れることも気にせずにその場に崩れ落ちた。達成感が彼の体を満たしていく。

「やっぱり無駄じやない。無駄じやないんだ！」

思わず鹿島は歓喜の叫びを上げた。自分の成果を噛みしめた。

「鹿島君。次は僕の番だよ。はい、ストップウォッチ」

「うん。分かつた。しつかり五本で收まるように頑張れよ」

藤堂は軽く頷いて、スタート地点へと歩を進めた。スタート地点へ向かう彼の背は大きく、学校内での氣弱そうな雰囲気は微塵も感じられない。それほどまでに運動会に燃やす闘志が大きいのだ。

スタート地点へ辿りついた藤堂が振り返った。霧雨と遠目でよく見えないが、藤堂の目が鋭く変化していた。表情も、無表情ではない。なんとも形容しがたい、凛々しい顔だ。

藤堂が左手を上げる。鹿島が右手を振り下ろす。ストップウォッチが平等に時を刻み始める。デジタル数字が、見る見るうちに『1』『2』『3』……と変化していく。

ストップウォッチから目を離し、藤堂の方へ向ける。両腕、両足を素早く動かし、前傾姿勢で駆けていた。学校での練習ではまつたく見られない姿勢だ。そして、ゴール地点へと辿りつく。それと同時にストップウォッチの『STOP』ボタンを押す。小さな画面を覗き込むと、『十六・八』と記されていた。

「すうーーー！ 本当にすうーーー！」

鹿島は自分のことのようになに喜んだ。藤堂はまだその喜びのわけを知らない。藤堂が鹿島の持つストップウォッチを横から覗き込むと、同じように喜んだ。

「信じられない！ 十七秒を切った！ 少し前までは二十秒近かつたのに……」

特訓の成果は、藤堂にも公平に現れていた。努力は、みんなに公平な成果を与えてくれる。決して裏切らない。

雨が一人を祝福するかのように降り注ぐ。汗が洗い流されて、少しだけ清々しい気持ちなる。一人は、しばらく各自の成果に酔いしれ、自分の世界に陶酔した。

一人がぼんやりしていると、雨が大粒のものに変化し始めた。体に当たると少々痛い。熱い一人の体を、雨が急激に冷却していく。雨に打たれていると、二人は自分の世界から脱出し、雨宿りが出来る場所を探した。藤堂はランドセルを背負って狼狽している。

「どうしよう！ この雨はやばいよ。どこか濡れない場所は……」

鹿島は雨に塞がれた視界を必死で広げようとした。そして、川にかかる大きな橋を小さく発見した。あの下ならば濡れることはない。

二人は全力で走った。恐らく、さつきのタイムよりも早い。その橋に辿りつくまで、二分といつといふか。距離にすれば五〇〇メートルか六〇〇メートル程度。

大粒の雨が一人の体を打つ。走るスピードも相まって、雨が体に衝突する衝撃も相当なものだ。ぱちぱちといつ雨が弾ける音が耳元で鳴る。

「ああー……もうびしょ濡れだ」

ようやく橋の下へと到着した。そこは薄暗く、すぐそこの暗がりから世にも恐ろしい怪物が飛び出してきそうだ。

鹿島はTシャツを絞り、水氣を切った。藤堂は無言でその場にへたり込んでいる。

「おおい、大丈夫か？」

藤堂に近寄り、手を差し伸べようとした瞬間、ぴかっと遠くの空で何かが光った。それに一瞬鹿島は動きを止めた。そして間もなく、暗雲を裂く閃光と轟音が周囲に満ちる。

「わあああああ！」

へたり込んでいた藤堂が跳ね上がる。鹿島が始めて見る、藤堂の恐れる顔だ。少しだけ嬉しい。

「ただの雷だろ？」

「それでも怖いものは怖いんだよ

「怖がりだなあ」

怖がる藤堂に構うことなく雷は鳴る。何度も光る。その度に藤堂の身が震える。腕にはランドセルを抱きかかえている。

その姿を見た鹿島は、何かを忘れていた気がしていた。こめかみに指を当て、考え込む。

わざわざから、やけに体が軽い……。軽い？

そうだ、ランドセルだ。教科書など、学校生活には欠かせない道具が入ったあの黒いランドセルだ。突然の雨をかわすことだけを考えていたために、持つてくるのを忘れてしまっていた。ランドセルは今も五〇〇メートルほど離れたベンチの上だ。雨が強まって、さつきまで見えていたベンチはもう見えない。

鹿島は思わず地団駄を踏んだ。それに気付いた藤堂が言つ。

「どうしたの？」

「……ランドセル忘れた」

「え？」

鹿島の言つことを信じられない、とこいつよつな顔で藤堂は見つめた。呆れていると言つてもいい。

「取りに行かないとまずこんじや」

「そうだよ。取りに行かなきゃまずこよ。あーもう一、べつにどうなれ！」

鹿島はまた元来た道を戻る。藤堂はぼうっとした顔つきで鹿島の背中を田で追つていた。

走る。走る。走る。これが運動会本番であればいいのだと鹿島は何度も頭の中で反芻した。

あつと今の百メートルのタイムは十七秒を切つていて違いない、と思えるほどに全力疾走する。

間もなく、ベンチに辿りつく。木で出来たボロ椅子の上で、表面に水の波紋を広げながら置かれていた。鹿島はそれを素早く手に取り背負う。ずつしりとした重みが両肩にかかる。おそらく、教科書に水が吸い込まれ、さらに重量を増しているのだろう。

早く藤堂の所へ帰る。そう思つた時。

何やら生ぬるい風が吹く。

気味が悪い。

閃光が空間を貫く。

鹿島は恐る恐る後ろを振り返る。

何もいないでくれ、そう願う。

後ろを振り返ると、怪物がこちらを睨みつけていた。

鋭い目に、長い髪。

髪は雨に濡れて顔に張り付いている。

怪物は大きな手を鹿島の方へ伸ばし、肩を掴んだ。

鹿島は怪物の手を払いのけ、叫びをあげて走り出した。

「助けて！ 怪物だ！」

「待て……」

怪物が鹿島を呼ぶ。立ち止まるはずがない。いや、立ち止まれるはずがない。後ろには人を殺しそうな顔つきの怪物がいるのだ。この状況で立ち止まることは死を意味する。

殺される！ 殺される！

鹿島は走る。今までに体験したことのないスピードで。死の恐怖はドーピング剤だ。検査にも引っかかるず、それでいて凄い効力を発揮する。生物の本能はすばらしい。

なんで俺が襲われなくちゃならないんだ！

鹿島は意味が分からなかつた。が、その意味を考えている余裕は一切ない。心を無に帰し、走ることだけに専念する。橋はもうすぐだ。早く藤堂に知らせて逃げないと 二人とも殺される

橋に辿りつき、危機を告げる。

「藤堂！ 早く逃げるぞ、怪物だ！」

「え？ 鹿島君、何言つて……」

「もうそこまで来てる……あ…………」

鹿島が振り返ると、すぐ後ろに怪物の姿があつた。また大きな手を伸ばし、鹿島を掴もうとする。怪物の姿はさつきよりもひどく、醜くなつていた。

もうここまでか。鹿島は声を無くし、怪物を田を見開いて眺めた。必死に見開いた田から涙が落ちる。終わりだ。

そして、怪物の魔手が鹿島にかかる。

「おい、鹿島。誰が怪物だつて？」

その声には聞きおぼえがあつた。しかし、脳がマヒして思考が出来ない。脳は恐怖で硬直している。

「あれ？ 黒田先生じゃないですか？」

黒田先生じゃないですか？ 藤堂のその一言が、鹿島の脳の硬直を解いた。

「エッ？ 黒田先生…………？」

「俺以外に誰がいる？」

怪物は顔に張り付いた髪を後ろに撫でつけ、深いため息をついた。

「あ、ああ…………」

鹿島を縛りつけていた緊張の糸がぶつりと切れ、そのまま冷たいコンクリートの上へと寝ころんだ。

ひんやりとした感触が心を落ち着ける。

「まったく。川原にお前らを見つけたと思ったら走り出して、ランセルを見つけたと思ったらまた走りだして。拳句の果てには俺を怪物扱いか？」

黒田がワイヤーシャツの水気を絞る。ぽたぽたと吸収されていた水がコンクリートへ落ちる。小さな水玉模様がコンクリート上に広がっていく。その模様が、不思議と何かの顔に見える。

「藤堂君は俺と一度しか会っていないのに気付いてくれたんだぞ？ それなのにお前は何なんだ。去年から事ある」とに保健室に顔を出しておいて、未だに俺の顔が覚えられてないか」

黒田は鹿島の頭を脇の下にさみ、頭のてっぺんを拳でこすつた。じつじつとした拳が少し痛い。鹿島は手で黒田の背中を一度叩いた。降参の合図だ。鹿島は解放される。

「ところで、黒田先生は何でこんな所にいるんですか？」
「そうだよ。何でこんな所に。俺たちが特訓してること、言つてないだろ？」

一人で黒田の方へ詰め寄る。藤堂は純粋な気持ちで質問していたが、鹿島は何とかして脅かした仕返しをしてやうと企んでいたが、その企みは永久に実現することはない。

「俺は帰りにこの川の堤防を通るんだ。これで満足か？」

黒田はにやりと不敵な笑みを浮かべて話を続ける。

「それに……特訓していたのか。まあ、前から見ていたし、薄々気付いてはいたがな。お前は筋肉痛で俺の治療を受けた。お前がこれ程真剣に運動に打ち込むには理由がある。まあ、運動会しかないがな。絶対に勝ちたい。去年の恨みを晴らしてやる。これだけだ。違うか？」

特訓の理由まで言い当てられた鹿島は頬膨らませてそっぽを向い

た。藤堂だけはまっすぐに黒田を見ている。黒田はしてやつたりといふ風な顔をしている。何とも大人げない。

「せっかくお前らの為に差し入れを持ってきてやつたというのに。怪物扱いされるんじや、やめだな」

黒田が背中に回していたショルダーバッグを前に回して、手をかける。ショルダーバッグには何やら簡状のものが入っているらしい。黒田の表情は優しいものに変化している。

「なになに？　いいもの？」

興味津々にショルダーバッグへと手をやる。

「お前らの態度次第で良いものに変わる」

「怪物だなんて言つてごめんなさい」

「よし」

黒田はショルダーバッグのフタを開き、一本の飲料水が入った瓶を取り出して、二人に手渡した。冷たい瓶が火照った体を冷やす。

「これって、サイダー？」

鹿島の言つとおり、黒田が手渡したものはサイダーだった。当時の子供たちが清涼飲料水を飲むなど、滅多になかった。飲めて麦茶だ。それに、炭酸を飲むと骨が溶けるんだ、と根拠のないことを言われて買つてもらえたなかつた。買つてもらえたとしても、月に一回がせいぜいだつた。鹿島にとつて、サイダーは憧れだつた。その憧れが今、目の前に存在するのだ。小さな気泡が瓶の中で楽しそうに踊つている。見ているだけで幸せになる。

「黒田先生。ありがとうございますー。」

一人揃つて礼を言つ。黒田は思い出したかのように栓抜きをショルダーバッグから取り出し、鹿島に手渡した。鹿島は嬉しそうに栓抜きで瓶のフタを抜いた。すると、勢いよく中身が飛び出し、泡と共にコンクリートへと流れた。これで少しだけではあるが飲むことの出来る量が減つた。

「ああ、もつたいない。藤堂、もう少し置いてからフタ開けた方がいいぞ」

藤堂はくすくすと笑い、サイダーをコンクリートの地面へと置いた。瓶が置かれるとき、澄んだ音がした。鹿島はこぼれそうになるサイダーを喉へと流し込む。清涼な感覚が彼の喉をうるおしていく。

「黒田先生」

「ん？ 何だ」

藤堂はおずおずと、小さく口を開いた。

「以前、保健室で治療を受けた時にも気になっていたんですけど、鹿島君、去年に何かあつたんですか？」

「ああ。こいつは去年の運動会で」

「やめてくれよー」

サイダーの瓶から口を離し、雨を裂くような大声で言つ。

「鹿島君。僕は君のことが知りたい。運動会で何か失敗したのなら、それを教えてよ。僕に何か出来るかもしれない」

鹿島は明後日の方を向き、もづどうにでもなれ、といった風な態度をしている。黙つてサイダーを少しずつ飲む。黒田はその姿を見て少し迷つたが、話を続けることにした。

「こいつは、去年も今と同じように特訓をしたことがある。運動会が開催される一ヶ月前からな。いつまでも運動の出来ない馬鹿でい

るのは嫌だつて。こいつは、過去四年間いつも運動会で活躍できずじまいだ。毎回毎回失敗の連續。誰にも勝てないなんて当たり前。そんな自分に終止符を打ちたい、つてな

「そうだつたんですか……。でも、じゃあ何で今年は自分から特訓しなかつたんですか？ 仮に少しでも運動をしていたのなら、あんなにひどい筋肉痛には見舞われなかつたと思います」

「去年の失敗はひどかつた。もう努力なんかしない、つて思えるほどに。だから練習をしたくなかつたんだろ？」「うう

「何があつたんですか？」

藤堂は栓抜きでサイダーのフタを外し、少しだけ飲む。相変わらず鹿島は明後日の方向を向いている。黒田は気にせず話す。

「負けたんだよ。こつひどくな。こいつは去年もクラス対抗リレーに出場していた。その時はアンカーだつたかな。第三走者までは順調に順位を上げていつて、後は逃げ切るだけという状況だつた。だが、こいつは負けた。もう勝てる、そう確信した瞬間に負けたんだ」黒田は短く生えた鬚を撫でる。そして、鹿島の方をちらりと見ると、こちらを向いて、膨れていた。

「なんで……？」

「ゴール前での大転倒だ。真っ白な勝利のロープを切る。その直前だ。こいつは何につまずいたのかは知らないが、顔から地面に衝突した。相当痛かつただろ？ な。けれども、自分がどれだけ痛がつても時間は止まらない。その間に他の走者がどんどんゴールしていく。自分が切るであろう勝利のロープは他人に切られた。その後のこいつはクラス内で、それはひどく責められたそうだ。そうだつたな？ 鹿島」

そうです、と小さくつぶやく。

「そんなことがあつたんですか」

「ああ。俺と鹿島が初めて話したのも、その時だった。赤ん坊みた
いに泣いていたよ。そりやあ泣きたくなるだろ? 精いっぱい努
力して、それが報われないんだから。それどころか、運動の出来な
いやつ、というレッテルを剥がすことすら出来なかつた」

報われない努力というものはただの徒労だ。それを鹿島は小学五
年生という幼い頃に味わわされていた。幼い頃に負わされた傷はな
かなか消えない。それどころか、時として深さを増すこともある。
もう努力なんてしない、そう思つのも当然のことであつた。

「努力なんてしない。俺はそう決めてた。今年も思いつきり負けて
やうう、なんて考えてた。多分、藤堂が特訓に誘ってくれなかつた
ら、あの時の悔しさを思い出すことはなかつたと思う。俺はずつと
負け犬だつたと思う」

鹿島は頭をぽりぽりとかく。照れ隠しだ。

「そうだつたんだ」

藤堂はサイダーの残りを一気に飲み干す。そして立ち上がり、鹿
島の方へと歩み寄る。肩を持ち、囁く。

「なら、尚更負けるわけにはいかないね! これからも頑張りつよ
! 後三週間もあるんだからさ」

鹿島は思わず涙を流した。一時とは言え、藤堂のことを見下して
いた自分を恥じた。そして、顔を上げて元気よく藤堂の言葉に応え
る。

「当たり前だ!」

雨はすっかりあがり、恐ろしいほど真っ赤に染まつた空が雲間か

ら顔を出し始めた。夕日の光が一人を照らす。その光は一人の燃え上がる闘志のようにも見える。

黒田は黙つて二人を笑顔で見つめていた。

六 ライバル意識

六

特訓の開始から三週間が経過した。あれから雨は一切降らず、常に快晴。まさに特訓日和の連續だつた。まるで一人の決意を後押ししているかのように感じられる。一人は土日も変わらずに特訓をした。土曜日は午前で授業は終わるし、午後はフリーだ。日曜にいたつては丸一日空いている。絶好の特訓日だつた。今日は日曜日だ。

いつもの川原で氣合いの入つた声がする。

「後一本だよ！ 頑張つて！」

一足先に新トレーニングメニューである『100メートル三本』を終えた藤堂がストップウォッチを片手に叫ぶ。

「おお！」

鹿島は余裕の表情で答える。

もう三週間前の鹿島ではない。まったくの別人になつていて。藤堂から効率の良いフォームを教えられ、筋力以外の部分も強化されていた。情けない鹿島の姿は消え去つた。

あれから、鹿島は弱音の一つも吐かなかつた。学校で棄権をしろ、と詰め寄られても悲しくなくなつていた。それどころか、せいぜい努力しろよ、と思うようになつていた。

普段から運動をしない者が急に本来の実力を発揮することは不可能だ。本番で発揮出来ない実力は実力とは言わない。それを鹿島は分かつっていた。他のリーメンバーは学校以外で練習はしていない。

鹿島とメンバーとの実力差は微々たるものに変化している。

その証拠に、学校で行われる練習で、確實にチームメンバーよりも良い動きをしていた。鈍く、ゆっくりと腕を動かす彼らよりも、鹿島は素早く、風を切るようにして腕を振っていた。そして、もうすでにメンバー内の一人のタイムを超していた。しかし、メンバーはそれをまぐれだとしか受け取っていないようだ。

藤堂の方は、というと、あまり成果は芳しくない。タイムを計測しても鹿島よりも遅かつたし、体力も伸び悩んでいる。藤堂はそれを少し気にしているようだった。だが、一言もそんなことは言わず、黙々と練習に励んでいた。

「三十九秒ちょうど！ お疲れ様！」

「せいぜい」と息を切らして鹿島は膝を折る。このメニューでは特にペナルティは課されないが、鹿島はそのすべてを全力で行った。少しでも練習を怠れば、今までの苦労がすべて水の泡になってしまふような気がした。勝利をうたかたの夢とするのは御免だつた。

「良い調子だね」

満面の笑みでタオルを持つて鹿島の方へ歩み寄る。鹿島はタオルを受け取り、溢れ出す汗を拭きとる。そんな鹿島の姿を見ている藤堂は、とても嬉しそうだった。

藤堂も、以前とはずいぶん変わった。常に何を考えているか分からぬ表情だったが、今では笑っていることが多い。常に感情を表に出さなかつたが、今では嬉しい、悔しい、などの感情を表に出すようになつていた。これもひとえに、特訓と鹿島のおかげだらう。

「もしかしたら、勝てるかもしないな」

拭いても、拭いてもあふれ出てくる汗を何度も拭く。拭き損ねた

汗が地面に落ちてじわりと滲む。

「鹿島君が一生懸命頑張ったからだよ。当然のことだよね」

「そうだな。もうあいつらに負ける気はしないな」

鹿島の顔は自信に満ち溢れていた。悪く言えば天狗になっていると言つても良いだろう。

「もう僕なんかとつこの昔に抜かしちゃったね。僕の方が早くに特訓を始めてたつていうのに」

笑つてはいるが、そう言う藤堂の目は何となく寂しげだ。

「まだ後一週間もあるんだし、大丈夫だよ」

「そりかなあ……」

しばらく休憩した後、一人は川原を離れて町内をランニングして回ることにした。いつまでも川原にいては気が滅入つてしまふし、なにより藤堂に気分転換が必要だと鹿島は判断した。町内は昼前だというのに入人が少なく、閑散としていた。二人は黙つて走つていく。

途中、クラスの人間に遭遇したが、無視をした。清々しい天気なのにも関わらず、二人の周りには重い空気が漂つていた。その空気に耐えかねた鹿島が藤堂に話しかける。

「なあ、藤堂」

「なに？」

「タイムが伸びないのつてさ、張り合つ相手がいないからじゃないか？」

「張り合つ相手は隣のクラスの人たちでしょ？ あ、とりあえず自分のクラスの人たちもかな？」

「んー……やっぱりライバルつて身近にいた方がいいと思うんだよな。うん。あ、その角は右に曲がつて」

鹿島が右手で進行方向を指さす。駄菓子屋の前を横切り、また走り続ける。遠くに犬を散歩している男性が見られる。

「やうかなあ」

「そりだよ。だからせ、俺と対決しない?」

「え? 何で? 僕らは同じチームじゃない」

「一緒にチームだけじゃねじやない。お互アンカーだし、どちらが一等賞を取るか。どひへ」

「う、うーん……」

この提案は以前の鹿島では考えられないほどにアクティブなものだった。

「いいよ。やるー。でも、やるからには絶対に負けないからね。覚悟しておこでよー」

藤堂からみるみるしつこい気迫が溢れ出す。どうやら鹿島の提案は大成功だったようだ。他の人間がヘマをすることで勝率が変化することには田をつむる。まずはなにより、藤堂を励ますことを優先した。

「よーしー。そりゃなくつちやな」

「絶対に、負けられないね。この運動会は」

そう言つと、藤堂がペースを上げて走り出した。俄然、やる気になつたようだ。鹿島も、その後に懸命について行く。

青い空が清々しい、田曜の午後。

七

きらきらと光る汗が一滴、一滴と重なり、努力が形を成していく。その形はいびつだが、とても美しい。

二人は、昼過ぎから模擬運動会を行うことにした。もちろん、彼らが出席する一〇〇メートル走と、クラス対抗リレーだけである。二人は横一列に並び、合図を待つ。その合図とは、川にいるシラサギが飛び立つときだ。一人の視線は一匹のシラサギに集中している。

シラサギがくちばしで水面をつけばむ。

ちょこちょこと歩く。

羽を折りたたむ。

羽を広げる。

羽の手入れを始める。

少し羽をばたつかせる。

二人は、今か今かとシラサギが羽ばたいて行くのを待っている。汗が少しずつ流れてくる。ずっとスタートの構えを取つたままだ。このままでは、シラサギが飛び立つ前に体力の限界がきてしまう。

鹿島は少し気を緩め、右手で汗をぬぐう。

その時、シラサギが飛び立つ。

美しい白い羽を広げ、大空のかなたへと。

藤堂はそれと同時に走りだした。

鹿島は出遅れる。

必死で藤堂を追う。

しかし距離は縮まらない。

視界が上下に揺れる。

息が荒くなる。

四肢を機関車のパドルの「J」とく動かす。

藤堂が両手を上げ、ゴールに迫りつく。

「勝つたあ！」

ゆづくつと歩きながら、藤堂が感嘆の声を上げる。

「はあ、まいっただよ」

油断していたとはい、ついさっきライバル宣言をした相手に負けてしまった。それも、優位に立っていた相手に、だ。これが本番でなくて良かった、と鹿島は思った。

本番中に気を抜いて、もしくは観客に目を取られていて負けてしまったのでは、笑い事にならない。ただ視線は走者だけを見るのだ。他人など、気に留めてはいけない。たとえ、親友が転ぼうとも。いわば、運動会は戦争なのだ。負傷者に気を取られていては、自分まで一緒に怪我をしてしまう。そんなことが続けば、自分たちの国は負けてしまうのだ。そして、負けた先に待つものは……。

「やつぱり、意識が違うとすこく変化するね。なんといつか……ああ、もう一、何も考えられないや」

藤堂はその場でばたりと倒れた。激しく肺を上下させていた。鹿島も、藤堂の横に腰を下ろした。

「油断したよ」「負け惜しみだ。」

「でも、フォームも違った。多分同時に走ってても、藤堂の勝ちだつたよ。おめでとう」

藤堂はにっこりと笑む。

「それは、運動会で勝った時に言つてよ」

「本番じゃあ、絶対に負けないから。覚悟しておけよ」

それから、一人は何度もそれを繰り返した。

秋が深まつてきているのか、最近暗くなるのが早くなつてきている。冬の到来は近い。

一人は長袖のジャージを羽織り、ベンチに腰掛けている。空は薄暗く、一等星が輝いている。息を吐けば、かすかに白くなる。周囲からは、たまに車のエンジン音が聞こえる。耳を澄ませば、川の流れる音が聞こえる。静かな空間。

「綺麗だね」

藤堂が星空を眺めている。

「うん」

きらきらと輝く星が、彼ら一人に祝福を『』える。

「なあ、藤堂。ずっと聞きたかったことがあるんだけど、今聞いてもいいいか?」

「許可を取る前に、質問を言つべきだよ」

藤堂は顔を鹿島に向か、無邪気な笑みを浮かべる。

「藤堂さ、何でこんなに頑張れるの? 本当にただ、俺たちを見下した、最低だつて言つた奴らに勝ちたいだけ? 少なくとも、俺はそれだけだよ。ただ、あいつらに勝ちたいんだ」

藤堂は口をつぐむ。少し顔を下に向け、物憂げな表情を浮かべる。

鹿島は、その顔をただじっと眺めていた。

どれくらいの時が経つただろうか。薄暗かつた空はすっかり黒くなり、わき役だった星々たちの光も見ることが出来るようになつていた。早くから見えていた一等星は、より輝きを増し、美しい。星と月の明かりが、二人を照らしている。

藤堂は小さく口を開き、言葉を漏らす。

「僕のお父さんがね、入院しているんだ」

「え？」

「結構重い病気らしいんだ。僕も詳しくは聞いてないけど、お母さんの表情を見てたらわかるんだ。お父さんは相当まずいはずだよ」「藤堂の淡々と語る口調は、戸惑いも、焦りも、何も感じられないものだった。まるで、父親が病気になつていても嘘だと思えるほどだ。しかし、表情は硬く、冷たい。真剣だ。

「それでね、僕はお父さんに運動会で勝つって約束したんだ。お医者さんもさ、僕が勝てば、きっとお父さんも病気に勝てるんだって言つてた。それに、僕は運動会でいつもビリだつたから、少しあは父さんに良いところを見せてあげないと。最後まで格好悪い僕じゃ、申し訳ないでしょ？」

それは、最後に父親に晴れの姿を見せよ、という考へにも思えた。藤堂は純粹に医師の言つことを信じているのだろうか、それとも、父親に起る奇跡を信じているのだろうか。

「だから、僕は何が何でも負けられないんだ」

藤堂は鹿島から目をそらし、星空を見上げる。藤堂の皿尻に、何やら輝くものが見える。涙だ。

藤堂は泣きたいのだ、と鹿島は察した。それなのに、今までずっと我慢してきたのだろう。父親に弱いところを見せないために。だから、あれだけクラスで罵られても、転んでも、泣かなかつたのだ。

「なあ、藤堂」

「何？ 鹿島君」

呼びかけたものの、その場に適した言葉が見つからない。こういう時、何と言えばいいのか、分からなかつた。そこで、黒田の言葉を借りることにした。

「泣きたければ泣けよ。男だからって、泣いちや駄目だつてきまりはないんだよ」

星空から目を離し、藤堂の方を見る。すると、彼の目から大粒の涙が零れ落ちているのが分かつた。声はあげていない。唇をゆらしながら、黙つて泣いている。

鹿島は彼に寄り添つた。すると、藤堂は声を上げて泣き始めた。今まで我慢していた分の涙も、これから流すはずの勝利の涙も、すべて出しつくかのように、泣いた。

一等星の光が美しい。しかし、これほどの美しさも、わき役の星たちがいなければありえないだろう。花束にしてもそうだ。美しい花たちの中に、カスミソウを入れる。カスミソウは引き立て役だ。今まで、彼らはその引き立て役だつた。だが、今回はそうではない。彼らはきっと、美しい花の、星の一つとなるだろう。美しい一筋の光を放つ、一等星に。

八 疾走

八

運動会本番。ついにやつてきた大舞台。空は青く晴れ渡り、雲ひとつない。まるで、早くも彼の勝利を祝福しているかのように見える天気だ。

鹿島は昨日の晩、なかなか眠ることが出来なかつた。とうとう自分の努力の成果を見せられるのだ。これほど嬉しいことはない。クラスの奴らは、きっと度肝を抜かれるだらう。そう考へるだけでにやけが止まらなかつた。

昨日、土曜日。小学校では最後のリハーサルが行われた。入場から、選手宣誓、選手の招集、応援合戦、退場まで。一部の競技については、模擬試合も行われた。クラス対抗リレーも行われたが、誰一人として本気で走る者はいなかつた。リレーメンバー全員が、本番で驚かせてやろうと考えているのだ。子供の心理は実に単純で、分かりやすい。

鹿島の今日の体調は万全だ。痛いところもかゆいところも、一つもない。布団から起き上がり、軽くジャンプをしてみる。そして、自分の体が軽いことに気付く。

二人は、運動会本番三日前から特訓を中止することにした。理由は単純なもので、本番に疲れがきて走れなくなつたら駄目だ、といふものだつた。これは藤堂の提案だ。おそらく、藤堂が止めなければ、本番前日まで根詰めて特訓をしていただらう。この体の軽さは、藤堂がいたからこそ実現したものだ。彼には、感謝しても感謝しきれない。

鹿島は体操服に着替えて、小さめのリュックを背負つて学校へと向かう。冬が近い秋の朝は、ひどく寒かつた。鹿島は少し体を丸めて歩いた。

教室に到着すると、ほぼ全員が顔を揃えていた。さすがに運動会本番に遅刻する人間はいないようだ。教室全体が張りつめた空気になつていて、普段からおちゃらけている生徒もおとなしかつた。鹿島が席に着くと、早速呼び出しを受けた。彼のチームメンバーからだ。

「おい、トシ。足とか痛くないか？」

柄にもなく、一人の男子生徒が鹿島の肩に腕を回す。

「無理して、体を壊したら、元も子もない」

「俺たちは、トシを心配して言つてるんだ」

「大丈夫だから」

鹿島がそう言つと、他の三人は舌打ちをして去つていつた。

彼らの言いたいことは分かつていた。棄権しろ、と遠回しに言つているのだ。決して、鹿島の身を案じてているわけではない。まだ、彼らは鹿島のことを役に立たないノロマだと思っているのだろう。

藤堂も同じことをされているのではないか、と思い、教室内を見渡してみる。案の定、藤堂の姿は、彼のチームメンバーの姿と共に消え去つていた。鹿島は心配に思い、教室を出て行こうとした瞬間、藤堂が姿を見せた。

彼の顔は笑顔だ。傷一つない。

「どうしたの、鹿島君」

「お前、大丈夫だった？　あいつらに何かされなかつたか？」

「ふふ。言つてやつたよ。お前らにも、他のクラスの奴にも負けないつて。そしたら黙つてどこかに行つちゃつたよ」

「ふつ」

二人は、入口の前で顔を見合させて笑つた。藤堂と特訓を始めてから一ヶ月。これほどまで笑つたことはなかつた。どちらかといえば、泣いている時の方が多いつた。今、こうして笑つていられるのも、藤堂のおかげだと鹿島は心の中で感謝した。

とうとう運動会が開催される時がやつてきた。学年全員が運動場に出て、入場門の外でクラスごとに整列して待機する。鹿島には、まだ心にゆとりがある。藤堂は鹿島よりも後ろに並んでいるので、顔をうかがうことは出来ないが、恐らく余裕があるだろつ。だが、他の生徒はどうだろつ。きっと緊張して、あまり話したくない気分だろつ。周囲の会話をしている生徒すべてが、緊張を紛らわせるために話しているのではないかと思われた。

『これより、第二十九回運動会を開催します!』

と、女性の声でアナウンスが聞こえる。とうとう運動会が開催される。鹿島は心の中で氣合いを入れる。アメリカ合衆国の行進曲である、『星条旗よ、永遠なれ』がスピーカーから流れ始める。

『紅組の入場です! 拍手でお迎えください!』

それを合図に、先頭を六年生の応援団長が大きな旗を持って歩いて行く。旗には燃え盛る炎とバラが描かれている。まさに紅組の名にふさわしいと言える。

学年順に入場門から出て行き、またアナウンスが聞こえる。

『僕らの心は燃えている! 僕たちに待つてるのは完全燃焼、完全勝利だ!』

紅組のキャッチフレーズだ。なかなかセンスがある。

応援団長について行くように、学年順に入場門から出て行く。手の動きも、足の動きもきっちりと整つている。

『続いて、白組の入場です！』

鹿島たちのチームだ。自然と背筋がピンと張る。

白組の応援団長が、旗を持って意気揚々と飛び出していく。白組の旗には淡い黄色の月と真っ白な狼が描かれている。狼は口を大きく広げ、何かに向かつて突進していつている。

『月のような纖細さ、狼のような豪快さ！ 一つを合わせもつ僕らに勝てるやつはいない！ 油断をすると噛みつくぞ！』

最後の一言が余計だ、と行進をしながら鹿島は思った。入場門から出て、運動場をぐるりと一周回る。運動場には、すでに多くの保護者が来ており、より一層緊張感を高める。運動会本部にはテントが張られていて、そこでアナウンスが行われている。そして、その横に救護班があるよつだ。黒田もそこにいる。もしかすれば、ここにお世話になるかもしない。

空には万国旗が飾られ、随所にスピーカーが取り付けられている。壇上の後ろに、国旗が掲げられている。

『最後は、青組の入場です！』

他の組と同じように、応援団長が先陣を切つて出てくる。彼らの旗には泡と川、そしてペンギンが描かれていた。

『冷静に戦い、冷静に勝つ。水のようにしたたかに、清らかな勝利を僕らは勝ち取ります！』

常に冷静ということはいいものだ。変に力を入れ、興奮しても勝利は勝ち取れない。

いひして、すべての組の入場が終わつた。

運動場がしんと静まり返る。壇上に校長が登つてきた。普段はスリーツだが、今日は紺色のジャージを着ている。教職員が対象となるリレーがあるので。

校長はマイクを取り、演説を始めた。視線の先は保護者席だ。『秋も深まり、良い季節となりました。まずは、ご来賓の方々、保

護者の皆さん、ご来場ありがとうございます。彼らは今日まで一生懸命に頑張つてきました。舞台は整っています。後は、お子様方を信じて、暖かく見守つていただきたく存じます』

「ほん、と一つ咳をして続ける。

『そりや、生徒の誰さん』

校長が生徒の方を見る

『昨年オリンピックで活躍された男性は知っていますか？　彼は、みんなから金メダルを期待されていたのですが、惜しくも銅メダルを取ることしか出来ませんでした。彼は悔しかったでしょう。優勝者が憎かつたでしょう。ですが、彼は優勝者を称えました。皆さんも、彼を見習つて、どの組が優勝しても、誰が勝つても負けても、拍手で称えてあげてください。それでは、あまり長くなると皆さんのがる気がなくなつてしまふので、このあたりで終わりにします。今日は、全力で頑張つてください！』

生徒たちから拍手が送られる。

「うう、一つのエピソードを元にした話というものは心に響く。演説というものは長ければ長くなるほどに、面倒くさく、胡散臭くなるものだ。この校長は良く分かっている。短い話で、的確に生徒たちの緊張を和らげた。良い校長だ。」

「選手宣誓！」
生徒代表は前へ

三つの声がある。

「三人の生徒は、右手を上げ、声を張り上げる。

を！」ヒカルが叫ぶ。

後ろから旗を持った生徒がやってきて、三人に各団旗を手渡す。代表の三人はその旗を掲げ、先端を一か所に集める。そして、大きな拍手がわき上がった。

それからは、退屈なものだつた。来賓の挨拶も、保護者代表の話

も、校歌斎唱も、国歌斎唱もだらだらと長く続き、苦痛だった。鹿島は終始ぼうつとしていた。まじめに聞いていたのは、校長の話と、選手宣誓だけだ。

そして、終わりを告げる言葉が出てくる。

『これで、開会式を終わります。それでは、生徒の皆さんは応援席に戻つてください。六年生の男子・女子一〇〇メートル走に出場する人は、入場門に集まつてください』

早速の出番だ。しかし、本番はそこではないことを覚えておかなくてはいけない。本番はクラス対抗リレーなのだ。それまで、体力は温存しておく。

入場門に、六年生全員が集まつてくる。みんな緊張しているように見える。鹿島は、その群れの中に藤堂を見つけ、話しかける。

「緊張してる？」

「ううん。まだ大丈夫。だけど、スタートラインに立つたら緊張すると思う。鹿島君は？」

「俺は大丈夫。もう何も怖いものなんてないよ」

鹿島は勢いよく胸を叩く。

鹿島には、昨年以上の没落は考えられなかつた。彼は、あれ以上の絶望も、失望もないと思っていた。鹿島が緊張していないのはこのためだ。去年以上にひどいことにはならないから大丈夫

「きっと、藤堂も勝てるや。リラックスしよう」

鹿島は藤堂の背を叩く。

「でも、俺たちが勝つべきところはクラス対抗リレーだから。それまでは、力を温存しておこうと思つ」

「僕は……この一〇〇メートルも本氣で走るよ」

「そつか。あ、先生が呼んでる。そろそろ出番だ」

入場門の方を見ると、六年生男百と書かれたプレートを持った教師が数人立つていた。鹿島は右から一列目の八番目に並ぶ。藤堂は

一列目の一番田だ。

一〇〇メートル走は、男子、女子に分かれて、合計一五試合が行われる。男子が八試合、女子が七試合だ。

『ただいまより、六年生男子一〇〇メートル走を行います!』

試合開始を告げるアナウンスが流れる。そして、スピーカーから、今度は、『双頭の鷲の旗の下に』が流れ始めた。この曲は、ヨーゼフ・フランツ・ワーグナーが作曲したもので、運動会では定番の曲だ。

軽快なリズムに合わせて選手が入場していく。そして、一直線に一〇〇メートル走のスタート地点へと向かう。曲が終わりかける頃に、全員がそこに整列した。

『双頭の鷲の旗の下に』がスピーカーから聞こえなくなると、次は『天国と地獄』が流れ始めた。これも、運動会ではよく聞かれるものだろうと思う。この曲の作曲者はジャック・オッフェンバッケだ。最初の数秒は静かな曲調だが、しばらくすると激しくなっていく。人のやる気を上げるには最適な曲だ。

スタート地点に辿りついた生徒たちが、はちまきを頭に巻く。

『第一レース、位置について!』

藤堂を含めて六人がスタートラインに立つ。学年でも、際立つて足の速い生徒が一人混じっている。その生徒は、足首をゆっくりと回したり、首を回したりして軽いストレッチをしている。藤堂は黙つて目をつむっていた。

そして、全員がクラウチングスタートの構えをとる。

頭を下げる。

スタートーが「よーい」という声をあげる。

スタートー・ピストルが天高く掲げられる。

藤堂が腰を浮かせる。頭は上げない。

火薬の爆発音が響く。

全員が一斉に走り始める。

彼らの後方には砂埃が舞いあがる。

藤堂が前へ出る。

その後を追うように、足の速い生徒がくる。

一人は加速を増していく。

足の速い生徒が藤堂を追い抜く。

白いゴールテープを切る。

藤堂は一着だった。

藤堂は僅差で負けてしまった。

鹿島は、その様子を、息をのんで見守っていた。周囲の歓声や応援などは、一切聞こえなかつた。ただ、藤堂だけを見ていた。後ろから彼を見ていたので顔は見えなかつたが、フォームは完璧だつた。あそこまでに完璧な走りを見るのは初めてだつた。藤堂は本番に強

かつたのだ。

第一レースが終わると、間もなく第一レースが始まった。しかし、第二レースが始まつてもなお、鹿島のクラスはざわめいていた。

「なんで藤堂が一着なんだ」

「あいつ、運動出来たんだ」

「俺たちも負けてられない」

などと、様々な意見が飛び交っていた。中には、まぐれだと言いきる生徒もいた。が、これは間違いなく藤堂の努力の成果だった。人は、明確な目標を持つた時、もつとも強くなる。彼にとつての目標は、『父親と共に自分も勝つ』ということだ。自分が負けてしまえば、父親も負けてしまうということが彼を強くしているのだ。それから、第三レース、第四レースと進行していった。そして、鹿島の番がやつてきた。

緊張はない。落ち着いている。

ゆつくつと体を動かし、スタートラインに立つ。

クラウチングスタートの構えをとり、練習を思い浮かべる。

隣にいるのは藤堂だ。

鹿島はそう思つことにする。

スターターが掛け声をあげる。

ゆつくつと腰を上げる。

紙火薬が爆発する。

直進し、素早く顔を上げる。

腕を素早く振る。同時に足も動く。

真っ直ぐ前だけを見て走る。

はちまきが風にたなびく。

素早く走るやまは忍者のようだ。

真っ白な勝利の紐を切る。

鹿島は一着だった。

走り終えた鹿島は、一つ小さな溜息をつき、立ち止まつた。全力は出していなかつた。白組の応援席から、歓声が湧き上がる。スタート地点に並んでいるクラスメイトからも「すごいぞー」という声が聞こえる。喜色満面だ。

「やつた」

鹿島は思わず口に出した。全力でかからぬ状態で勝利を勝ち取つたのだ。嬉しくないはずがない。これで全力を出せば、どれだけの勝利が待つているのか想像することは容易かつた。

走り終えた選手が並んでいる場所へ、鹿島は向かう。今も田の前では壮絶な戦いが繰り広げられている。今走っているのはクラスで一番足が早い生徒だ。とんでもないスピードで駆けて行く。結果は、もちろん圧勝だ。

そうして、六年男子一〇〇メートル走は終了した。選手たちは退場門へ向かい、応援席へと戻る。

応援席に戻ると、藤堂が鹿島に話しかけてきた。

「おめでとう、鹿島君」

「そつちこそ」

「まさかだつたよ。一組のあの人には僅差まで追い詰めることが出来
るなんて、考えもしなかつた。鹿島君のおかげだよ、ありがとう」「
何が?」

「特訓につきあつてくれたし、ライバル宣言までしてくれたよね。
正直、あれがなかつたらタイムは伸びなかつたと思うよ」

鹿島は藤堂の率直な感謝の言葉に、照れた。頭をかき、鼻を指で
こすつた。

「そういうのは、クラス対抗リレーで勝つてからだ」

二人はまた、顔を見合せて笑つた。最高に幸せだつた。もう、鹿
島と藤堂の勝利は約束されたようなものだつた。たつた一ヶ月で何
が変わるものか、と人は言うが、何もしなかつた人間には分かるま
い。人は一ヶ月で変わるものだ。

「そうだね。これからが本番だしね」

そうして二人が話していると、鹿島のリレーチームのメンバーの
一人がやつてきた。その生徒は複雑そうに、顔を歪めている。しか
しその顔に、少しだけ申し訳なさそうな色が浮かんでいる。

「トシ。お前、本当は足早かつたんだな。他の奴らの分も俺から謝
つておくよ。今まで馬鹿にして本当にごめん」

そう言つと、その生徒は深々と頭を垂れた。それを見た鹿島は、
何とも言えない気分になつた。見返すはずのクラス対抗リレー前に
見返してしまつた気分だつた。彼の素直な気持ちは嬉しいが、もう
少し後で言つて欲しかつた、と鹿島は思つ。

「最後のクラス対抗リレー。一緒に頑張ろうな!」

生徒が手を差し出した。鹿島は複雑な気持ちだつたが、彼の気持
ちを素直に受け取ることにした。右手を差し出し、ぎゅっと握つた。
その握手は、今までに感じたことのない、暖かなものだつた。

「それじゃ、藤堂君も頑張って！」

「そう呟つと、彼は去つていった。

「まだまだ。まだまだやつてやるんだ。一〇〇メートル走なんかで勝つても意味はないんだ。最後まで、やつてやるー！」

藤堂は、そう呟く鹿島の顔をじつと見つめていた。

九 一人じゃない

九

午前中のプログラムが終り、休憩時間になった。

100メートル走では、白組がトップを独占していたが、その後の下級生が行う競技で、他の組に差をつけられてしまった。中でも、一年生が対象になる、『借り物競走』はひどいものだった。

白組以外はすんなりとモノを見つけることが出来たが、白組はというと、いつまで経っても目的の物が見つからないのだ。参加していた生徒は慌てふためき、ついには、出場していた生徒が泣き出してしまった。結局、その試合では白組は大敗を喰した。

他の競技の結果もよろしくなく、100メートル走での圧倒的勝利は、なかつたものになってしまった。現在の紅組、青組との点差は小さくはない。

鹿島は母親、そして父親と共に昼食を食べた。その時間は、彼にとって、とても心の安らぐ時だった。父親からは「よくやった」と褒められた。今までにここまで褒めてもらったことはあまりなかった。頑張つて良かつた、と鹿島は思つた。また、父親と母親がいることのありがたみを噛みしめた。藤堂には、こんな思いは出来ないのだ。

昼食を食べ終わると、藤堂のいる所へと向かつた。

しかし、彼はどこにも見当たらなかつた。鹿島は諦めて両親の元へ帰ろうとした、その時。藤堂が姿を現した。鹿島は素早く藤堂に

近寄り、笑顔で話しかけた。

「もう匂いはん食べた?」

「うん」

藤堂に元気がない。

鹿島はじつと藤堂の顔を見つめてみる。そして察した。

「「めん。来てない……んだよな?」

「うん。お母さんは、お父さんを見ておかないと駄目なんだって。晴れの舞台……見てほしかったな」

藤堂は少しばかんでみせる。しかし、それが本心からきているものではない」とは明らかだった。

「元気出せよ。藤堂が頑張らなくちゃ、お父さんも助からないんだろ? お父さんを助けられるのは、お医者さんじゃなくて、藤堂なんだぜ? もしリレーで勝つたら、嫌になるほど聞かせてやれよ。僕は勝つんだって。信じてくれなかつたら、その時は、俺は証言してやるよ」

とにかく思いついた励ましの言葉を並べ立てた。それに意味があるかどうかは分からぬが、何も言わないよつけマシだと、鹿島は判断した。

「でも、やっぱしあびしいんだ。みんなはああやつて、楽しそうしているのに、僕には誰もいない。僕は独りぼっちだ」

「俺がいるじゃんか

鹿島は少しそうした風な顔をした。小さく頬を膨らませ、少しだけ顔を下に向けている。

「鹿島君」

「俺がいるだろ！ そりや一ヶ月しか一緒にいなかつたし、クラス一緒だつたのにずっと話をしなかつたけど……。それでも、藤堂には俺がいるじやん。一人じゃないだろ！」

藤堂の肩を両手でつかみ、揺さぶつた。

藤堂は小さく笑う。

「うん、僕には鹿島君がいる。『ごめんね、最後の最後まで弱氣で。僕、最後まで頑張るよ。ありがとう。僕は、一人じゃないよね』

それから、鹿島は彼に何も言つことが出来なかつた。一人の肉親に頼ることも出来ない藤堂を心の底から憐れんでいた。その行為が良い行いだとは思えない。けれども、そうするしか出来なかつた。親がいる鹿島に、親のいない藤堂の気持ちは理解出来ない。

自分の親が危ない状況にいる時、自分に親がいない時、自分はどういう気持ちになるだろうか、と鹿島は想像した。けれども、今、日常的に会つている人間がいなくなつたり、病氣で危なくなることなど、考えられなかつた。どれだけ想像を働かせても、親の存在を消すことなんて出来なかつた。藤堂の存在も、消すことが出来ない。朝起きて、一緒にご飯を食べて、挨拶をして、行つてきますの挨拶をして、夕方にはまた会つて、晩ご飯を食べて、夜にはおやすみの挨拶をする。それが当たり前のことなのだ。人は、日常が崩壊する時を知らず、またその時を考えようともしない。当たり前が、当たり前に存在すると錯覚している。それは、いつ崩壊してもおかしくないのにも関わらず、だ。日常を不变のものと疑わない。しかし、それは異常なことではない。それが当たり前なのだ。

鹿島は、藤堂と別れると、真っ直ぐ両親の元へ向かつた。急に愛しくなつたのだ。親のいる今のうちに、甘えておきたかった。

日常が崩壊する悲しさを知りたくなかつた。

十 フラッシュバック

+

午後のプログラムが開催される時間になり、鹿島は保護者席から応援席へと戻つていった。そこにはすでに藤堂の姿があつた。彼の表情は依然として固かつた。何とかして励ましてやりたかったが、鹿島には何も言つことは出来なかつた。ただ、彼の隣に座り、気持ちを落ち着かせてやることしか出来なかつた。

午後の最初のプログラムは、応援合戦だ。

各組の応援団が運動場の真中に立ち、演技をする。その時、掛け声をクラスメイトがかける。その演技の精巧さなどを判断して、審査員が点数化するのだ。

紅組から演技が始まる。

紅組は長い、赤い布のついた棒を振り回し、踊つていた。なんでも、その布は燃え盛る炎をイメージしているという。良い発想をしいてるな、と鹿島はずつと見とれていた。

次に白組の演技が始まる。

応援団が素早く運動場の真中に立ち、演技を始める。

鹿島たちも大きな声を張り上げて演技を盛り上げた。

青組に、特筆すべき点はなかつた。

それから、一年生と六年生が合同で行う玉入れ、五年生による組み体操、一年生から四年生までの各々のクラスのダンス、四年生による騎馬戦などが行われた。どれも、気合が入つていて、見ていて

退屈しなかった。

思わず「頑張れ！」と叫んだり、「ああ……」と落胆の声を漏らす者が多くいた。鹿島もその中の一人だった。

去年までは、ここまで余裕を持つて競技を眺めることは出来なかつた。自分の出番が怖くて怖くて仕方がなかつた。ずっと緊張して、他の景色なんて何も見えなかつた。しかし、今年はどうだ。心に余裕があり、他の競技を面白おかしく観戦出来る。一つの競技の結果に一喜一憂出来る。この事が、どれだけ幸せなことだろうか。

去年は、一ヶ月かけて練習したにも関わらず、緊張していた。今年は去年の練習期間よりも一ヶ月も短いのに、この余裕だ。この差は何なのだろうか。鹿島はすぐに違いを察した。去年は、ただ闇雲に走つて練習した気になつていたのだ。中身も何もない。ただ、走つていただけだつた。だが、今年は藤堂によつて入念に練り、組まれたメニューをしつかりこなした。ただ走るだけではない。フォームから、なにからなにまで綿密な計画のもとに実行した。この違いはかなり大きい。身体的にも、精神的にも、だ。

『これより、五年生による、四×一〇〇メートルリレーを行います！ 選手入場！』

アナウンスと共に、五年生のリーメンバーが入場してきた。第一走者がバトンを持ち、しつかりと整列している。

スピーカーから流れる曲が、『クシコス・ポスト』に変化する。

去年の鹿島も、いつやつて入場していた。

彼の中で、少しの恐怖が芽を出す。

第一走者からアンカーまでが指定位置につき、一人の生徒が「絶対勝つぞ！」と叫んだ。それに応えるかのように「おう！」という声が聞こえた。すごい気合いだ。

スタートラインに立ち、大きく深呼吸をしている。アンカーの方を見ると、かなり緊張しているのか、ぼうっと突っ立つたままだった。彼は白組だった。

スタートーピストルが叫びをあげ、それから逃れるかのように選手が走りだす。まるで何かに追われているかのように必死である。

第一走者が第二走者にバトンを手渡す。どのチームも引けを取らない。差はほとんどない。わずかに白組が優勢か。

第二走者がカーブを曲がり、第三走者に力強くバトンを渡す。

第三走者からアンカーにバトンが渡る。差はかなりある。

残すはカーブとわずかな直線だけだ。白組が優勢だ。

栄光は目の前だ。白組のアンカーが逃げる。

しかしその時。

白組のアンカーがカーブを曲がり切れずに転んだ。

彼は一回転し、やがて砂の上に叩きつけられた。

次々に他の選手が彼を抜かしていく。

ただ、それを茫然と眺める彼。

いろいろと転がっていくバトン。

その姿を見た鹿島は、身を震わせた。

まるで、去年の自分を見ているかのような錯覚に襲われた。

今まで、必死で抑えこけていた恐怖の芽か花を咲かせてしまつた。

その花は恐らくぐいの花の形で
この世になし色をしてしまふ

「二年生の間違った言葉を何回も繰り返すんだから、もう我慢できないんだよ。」

「絶対にいやだ！」
「え、鹿島町！」
「も、あんな風になるなんて！」

鹿島は体育館裏に来ていた。あの光景を見ながら、体の震えが止まらなかつた。自分も、あの生徒のように転んでしまうのではない。そう思えてならなかつた。

過去の記憶がフラッショバッくする。

嘲笑するクラスメイト。

憐みの表情を浮かべる保護者。

頑張れ、と容易く言つ他学年の生徒たち。

諦めるな、と壊れたレコードのようと言つ教師。

無情に転がっていくバトン。

赤く擦りむけたヒザ。

聞こえない『ケシコス・ホスト』

バトンを捨てに行くみじめだ。

ゴールする時の悲しみ。

そのすべてが鹿島を覆い、彼を恐怖のどん底へと突き落としてしまった。それらは重く、硬く、逃れられない。まるで鎖のよつに彼を縛り付ける。

知らす知らすのこせに涙かこぼれて止まらない

る。しかし、消える気配もなければ、枯れる素振りも見せない。

「鹿島君、ここにいたんだ」

優しい声。

鹿島が顔を上げると、そこには息を切らせた藤堂の姿があった。

「皆、鹿島君がいたよ！ こっち、こっち！」鹿島はまだ顔を地面の方に向ける

すぐ行く、と小さく聞こえる。

少しの後、鹿島はまた顔をあげた。すると、そこには彼のリーメンバーがいた。珍しいことに、藤堂のチームメンバーもいた。

「みんな心配していたんだよ。急に走つて行っちゃうから、ぐすぐすと涙を流しながら、それを聞く。

「どうしたの？」

「去年の……。もういやだ……あんなの」

藤堂は黙っている。何も言つことが出来ないのだ。何せ、去年の出来事は、黒田から聞いただけだったのだから。人の心の傷にやすやすと触れる行為は罪深い。

「そんなの、気にするなよ。去年は運が悪かったんだよ」

その言葉は、藤堂から放たれたものではなかつた。それは、彼を一番見下していた生徒からのものだつた。何度も鹿島に棄権を迫つた生徒である。彼は、去年も同じクラスだつた。奇しくも、同じリレーチームだつた。

「でも、またあんなふうになつたひ……俺、もう生きていけない」「校長先生も言つてたろ？ どの組が優勝しても、誰が勝つても負けても、拍手で称えてあげてくださいってさ。俺たちはお前が負けても、転んでも、何も言わない。拍手で迎えてやる。なあ、皆」「もちろんだ！」

即答だつた。

鹿島は、涙を止めようとしたが、止まらなかつた。むしろ、どんどんあふれてきて、さつきよりもひどくなつてゐる。拭いても、拭いても、拭いても。

「それこそ、トシ。練習頑張つてたんだろ？ 百メートル走の結果を見れば嫌でも分かる。そんなに頑張つたやつを否定する権利なんて、俺たちにはなかつたんだよ」

「なんでそれを？」

「藤堂君から聞いた」

「『めんね、鹿島君。勝手なことして』

鹿島には、藤堂の謝罪の意味が分からなかつた。本当に悪いのは自分なのに。なぜ藤堂が謝つていいのだらう、と。

『最終種目、六年生のクラス対抗リレーに出場する選手は、入場門前に集まつてください!』

最終招集のアナウンスが流れる。

「さあ、勝ちに行くぞ!」

「鹿島君! 行こう!」

他のメンバーたちも同じことを囁く。

「うんっ!」

藤堂が手を差し出し、鹿島を置きあがめさせる。涙を拭き、正面を見据える。

「ねえ、円陣を組もうよ

藤堂が言う。

「おー、いいな。やるひやるひ」

合計八人が綺麗な円になる。そして、中心で手を重ねる。

「絶対勝つぞ!」

せーの、と小さく囁く。

『おつかれ』

十一 理あめ「おめでとひ」

十一

ついにやつてきた。最後の大舞台だ。

八人は入場門に行き、しつかりと整列する。

鹿島も、藤堂も、そして他の生徒も、皆顔つきが変わっていた。新しい友情の名のもとに、絶対に勝つてやるという意志を固めた。もう彼らに敵などいないだろう。

現在の点数は、紅組が四九〇点、白組が四五〇点、青組が三〇〇点だった。クラス対抗リレーの点数は、一着が一〇〇点、二着が五〇点、そこから先は点数が落ち、四〇点、三〇点と続いている。

鹿島たちの白組が優勝するためには、少なくとも一人が一着を取る必要がある。つまり、鹿島か藤堂かの、どちらかが逃げ切らなくてはならないのだ。責任重大である。

鹿島は深呼吸をして、気持ちを整える。

『それでは、ただいまより、最終種目、六年生によるクラス対抗リレーを行います！ 選手入場！』

アンカーである、鹿島と藤堂を先頭にしてスタートラインまで進行していく。スピーカーからは依然として忌まわしい『クシコス・ポスト』が流れている。

第一走者がスタートラインに立ち、第一走者がその後ろにつく。クラス対抗リレーは、一人一百メートル走る。そのため、瞬発力だ

けではなく、ある程度の持久力も必要とされる。

自分の鼓動が速くなるのが感じられる。鹿島は、藤堂の方を無意識に見る。その視線の先には、落ち着いた表情をした藤堂の姿がつた。彼は鹿島に気付くと、拳を握り、親指を天に向けてほほ笑んだ。不思議と、鹿島の中から緊張は消えていた。

スピーカーから流れる曲が変化する。『剣の舞』だ。作曲者はハチャトゥリアンである。この曲は、運動会を締めくくる最高の舞台にふさわしい名曲である。

『位置について』

第一走者が鹿島を見て、にっこり笑う。右手にバトンをしっかりと握る。自分の位置を確認すると、静かに頭を下げた。

『よい』

スタート者がスタートピストルを天高く掲げる。

銃身が太陽に照らされて鈍い光を放つ。

そして、勝利へ向かうための一発が鳴った。

すべての走者が勢いよく駆けだしていく。

第一カーブを曲がりきった時、白組の一チームは後れを取つた。さすが、クラスでも選りすぐりの人材を抜てきしているだけある。どのチームも引けを取らない。直線コースで青組の一チームが紅組を抜かしていく。白組は必死に四チームの後を追う。

第一カーブで、インコースに入り損ねた白組の一チームがさらに差を広げられていく。そのチームは、藤堂のチームだった。鹿島のチームは、その前を走っている。

白組の第一走者にバトンが手渡される。次いで、第二走者がレンの中に入り、待機する。

鹿島のチームの第一走者は息を切らせて話す。

「ごめん、スタート出遅れた……」

寂しげに頭を垂らし、申し訳なさそうにする。

「まだ大丈夫！」

そんな会話をしている間にも、戦況は刻一刻と変化していく。鹿島のチームも、藤堂のチームも、どんどん差が広がっていた。

運動会というものは、想像出来ないほどに真剣勝負の世界である。その階が戦う様は、まさに戦争である。騎馬戦が、その良い例であろう。戦況は刻一刻と変化し、脱落者も出る。しかし、脱落者にひるんでいる暇はない。ひるんでいては、次は自分がやられてしまうのだ。こういう場面では、気をしつかり持つ以外に、自分を守る術はない。

第二走者にバトンが手渡される。鹿島はレーンの中に入る。レンの中には、すでに藤堂がいた。

今の順位は紅組、青組、青組、紅組、白組、白組である。今まで、勝つことは難しい。だが、第三走者にバトンを手渡してから、差は徐々に縮まつていった。だが、順位が変化するまでには至らない。

白組の一チームの第三走者が第一カーブを曲がりきる。ひとつひとつ鹿島と藤堂の出番だ。

次々に他の組のアンカーが走りだしていく。そして、鹿島にバト

ンが手渡され、それからすぐ藤堂にバトンが手渡された。バトンは熱く、汗で濡れていた。バトンからは、みんなの思いが込められている気がした。

鹿島はそれを握りしめて走り出した。

短い直線を全力で走る。

カーブで、少しだけアウトコースを走り、四位の紅組を抜かす。

鹿島は先の青組をも追い抜く。

少し遅れて、藤堂もその青組を追い抜かす。

応援席が湧き上がる。

保護者席からも、歓声が聞こえる。

アナウンスをしている人も凄い声で実況している。

直線コースで、もうひとつ青組を抜いて行く。

砂埃を舞いあげ、汽車のように走っていく。

残すは最後の紅組だけだ。

第一カーブで、鹿島が最後の紅組の横を風のじとく走り抜けた。

藤堂もその紅組を追う。

差は縮まつっていく。

藤堂も紅組を追い抜いた。

勝利はもうすぐだ。

カーブを曲がりきる……、

その時。

鹿島の足が絡まる。

タコの足のよじこぐねぐねと曲がった気がした。

バランスを取ることが出来ない。

鹿島はカーブを曲がりきれない。

視界がぐるぐると回る。

そして、真っ暗になる。

砂埃が激しく舞い上がる。

彼の耳には、落胆の声と、『剣の舞』だけが聞こえる。

バトンが遠くに転がっていくのが見える。

すぐに、鹿島の横を藤堂が走っていく。

自分の田の前を走り去っていく紅組と青組が見える。

田をつむり、真っ赤な世界を見る。

また、去年の記憶がフラッシュバックする。

涙すら流れない。

終わった。藤堂にも、他の奴らにも負けた。でも、藤堂は勝ってくれた。白組の優勝だ。俺はこのまま、優勝の余韻に飲まれて忘れられればいい。そうすれば、みじめさも、何もないんだ。

意識をシャットダウンしようとする。

「鹿島君、大丈夫？」

真っ赤な世界が黒く変化する。人影のせいだ。

一体誰だろう。

「鹿島君！」

鹿島はゆっくりと田を開く。すると、すでにゴールをしているはずの藤堂の姿があった。

「え？ 何で……」

「田の前で転んじゃうから、心配で」

「そんな。じゃあ、ゴールは？」

「してないよ。それよりも、鹿島君が心配なんだ。立てる？ 一緒にゴールに行こう？」

藤堂は鹿島の腕を自分の肩にかけ、持ち上げた。鹿島もゆっくりと自分の力で立ち上がる。そして、ゴールに向けて歩き出す。

なんてみじめなんだう。

応援席、保護者席、教員、そのすべてが彼らを祝福している。

あのまま藤堂が勝つていればこんな事にはならなかつたのに。ゆっくり、ゆっくりとゴールに近づいて行く。

藤堂のせいだ。

そして、栄光のゴールへ辿りつく。

「こんな田に遭つのは、全部藤堂のせいだ！」

「おめでとう。」

藤堂が笑顔で述べる。

運動場が拍手の音だけで埋められる。

しかし、鹿島は笑顔ではなかつた。それとは逆に、藤堂に対する怒りと、憎悪に燃えていた。鹿島は、そのまま倒れていたかつた。そのまま、落胆と絶望に飲み込まれていたかつた。なのに、藤堂に助けられてしまつた。

彼は、藤堂の憐みが氣に食わなかつた。自分さえ転ばなければ、藤堂は一着でゴール出来た。そうすれば、白組の優勝は決まつていだ。なのに、藤堂は鹿島を助けに來た。そのせいで、白組は勝ちを逃してしまつた。鹿島は、重大な責任を感じた。その責任を負わされたことに、鹿島は怒つてゐるのだ。

鹿島は黙つて藤堂の手を振り払い、無愛想に退場していつた。

あの時の、悲しそうな藤堂の顔が、今でも忘れられない。

そうして、小学校生活最後の運動会は幕を下ろした。

戦争に負けた悲しみと、親友に対する憎しみだけを残して。

十一 絶交

十一

教室に戻つてから、鹿島は藤堂と一言も会話をしなかつた。藤堂は、すぐに保健室に行くことを勧めたが無視をした。もう、誰の憐みも受けたくなかった。藤堂だけでなく、クラスメイトも彼と同じことを言つたが、無視をした。その他にも、気にするなど、失敗は誰にでもあるだの、安っぽい慰めの言葉をかけられた。その言葉は、弱者をいたぶる刃だ。一言一言が放たれる度に、鹿島は藤堂のことを強く憎んだ。

藤堂が憐みをかけなければ、これだけみじめな思いをすることはなかつた。藤堂が勝つていれば、皆は優勝に酔つて自分を忘れてくれたのに。藤堂が変な期待をさせなければ。藤堂が特訓に誘わなければ。そんな思いがずっと鹿島の脳を支配していた。怒りと憎悪が鹿島を押しつぶす。

しばらくして、終礼が終わり、クラスメイトが帰り始めても、鹿島はじつと机に突つ伏していた。誰が教室に残つているのかも、今が何時なのかも、一切分からぬ。

どれくらい経つたか。鹿島が顔を上げると、藤堂ただ一人が教室に残つていた。彼は申し訳なさそうに下を向き、まるで、特訓を始める前の彼に戻つたかのように感じられた。

顔を上げた鹿島に気付いた藤堂は、小さくつぶやいた。

「「」あんね、鹿島君」

「「」あんね」

「全部、僕のせいだよね」

「「」あんね」

鹿島は徐々に声を荒げていく。

「僕が勝つていれば良かつたんだよね」

「「」あんね」

鹿島は机を叩いて、席から立ち上がった。

「やうだよー 藤堂、お前が勝つていれば、俺はこんなにみじめな
思いをしなくて済んだんだよー そもそも、お前が特訓に誘つたか
らこいつなつたんだ！ 全部…… 全部お前が悪いんだ！ 俺が転んだ
のも、こんなに悲しいのもー 全部お前が悪いんだ…… みんなして
根拠ない言葉で俺を調子に乗らせて。勝てるつて錯覚させて。それ
で待つっていたのがこれかよ……。ふざけんなよ……」

鹿島は涙を流した。唇が震えて止まらなかつた。涙も、震えも止
められなかつた。今は、声を出さないだけで精いっぱいだ。
「でもね、これだけは言わせて。鹿島君が頑張つたことは無駄じや
なかつたはずなんだ。それだけ、覚えておいてほし……」

「「」あんねこいつって言つてるだるー 藤堂に何が分かるんだよ。もう、
いいから帰れよー 一度と俺に話しかけるなー」

鹿島はその言葉を吐き捨て、リュックを背負つて教室を出て行つ

た。彼が出て行つた後には、藤堂一人だけが取り残された。

「鹿島君。短い間だけど、一緒にいれてよかつた」

薬品の匂いが漂う保健室。

黒田はオキシドールを布に染み込ませ、鹿島の傷口にあてた。

「いつ」

あまりの痛さで、鹿島は足をばたばたとさせる。

「それにしても、派手に転んだよな」

「言わないでよ。忘れないんだから」

頬を膨らませ、俯ぐ。そして、痛みを堪える。

「それでも、今日の運動会は感動的だつたな。最後の藤堂君の行動には胸を打たれたな。ありや素晴らしいよ。優勝よりもお前を取つたんだぞ？」

また、鹿島の傷口がえぐられる。傷口は徐々に膿みはじめめる。

「あんなやつ、死んじゃえばいいんだよ」

「何言つてんだ、お前は」

黒田はオキシドールを机の上に置き、鹿島を睨みつけた。

「あいつが、俺を助けなければ白組は優勝だつたのに。それなのに、俺の所に来てさ。何が『大丈夫?』だよ。俺がどれだけみじめなのかも知らずに。さつさとゴールして、俺を見下せばよかつたんだよ。ああ、馬鹿らしい」

「……それで？ 藤堂君はどこだ？」

「知らないよ。あんな奴とは絶交したんだ。どうか行っちゃえればいいんだよ、あんな奴」

その時、鹿島の頬に衝撃がはしつた。

その衝撃は、転んだ時よりも強烈だった。

鹿島は椅子から転げ落ちてしまった。

「な、何すんだよ！」

「おい。お前、あの時藤堂君がどういつ気持ちでお前を助けに行つたのか、分かってるのか？ 見捨てようと思えば見捨てられたお前を、わざわざ優勝を逃してまで助けに来たんだぞ？ その意味が分かつて言つているのか？」

黒田の目は怒りに満ちていた。鹿島を見下ろし、拳を固く握つている。今にもそれは振り下ろされそうだ。これが、怪物黒田といわれる所以なのだと、鹿島は思った。

「だからなんだよ！ 見捨てたければ見捨てれば良かつたじゃないか！ なんだよ、あんな偽善者！ 黒田先生だつてそうだ。頑張れだのなんだの言つて俺に期待させて。俺がこうやって失敗するのを見て楽しんでんだろ！」

「お前……」

黒田が鹿島の襟元を掴み、鹿島の体を宙に浮かせる。凄い力だ。だが、黒田はすぐに彼を元の位置に降ろした。

「もついい。帰れ」

「言われなくても帰つてやるー もう一度と来ないからなー。」

保健室から出ると、鹿島は真っ直ぐに家へと向かつた。

道中、心に大きな穴が開いた気がしていた。それも、永遠に埋まりそうもない、とても、とても大きな穴が。誰に慰められようとも、たとえ自殺しても、埋まらない、大きな穴。

真っ赤に燃える夕日が、過去の思い出を焼きつくしているように見える。鳥が、やけにうるさい。

本当に、藤堂が悪かつたのかな？

十三

運動会が終わってからというもの、藤堂は姿を見せなくなつた。鹿島の前に姿を現さないのではなく、学校にすら来ていないのだ。クラスでも噂されるようになつてきた。死んでしまつたという噂もまことしやかにさせやかれている。

鹿島は、あれからずつと罪悪感にさいなまれていた。怒りと憎悪は、悲しみと後悔に変わつっていた。

なぜあんなことを言つてしまつたのか、今の鹿島には理解出来なかつた。鹿島は、彼からの優しい抱擁を痛めつける刃だと勘違いしてしまつっていた。藤堂は、優しく近付いて、鹿島を切り付けるのだと。しかし、実際は鹿島が藤堂を切りつけていた。鹿島はより残酷な斬撃を藤堂に加えることになつてしまつた。

藤堂のあの判断は、決して容易なものではなかつただろう。クラスの人間が、藤堂の行為を認めてくれるとは限らないのだ。もしかしたら、ひどい誹謗中傷を受けるかもしかなかつたのだ。そのリスクを冒してまで、彼は鹿島を助けたのだ。それは憐みではなく、両親から受ける愛よりも暖かな真の愛情だったのだと鹿島は思う。

それを鹿島は無下にした。それどころか、藤堂の気持ちすべてを踏みにじり、彼のしてくれたことすべてを否定してしまつた。藤堂が特訓に誘つてくれなければ、もつとみじめな結果が待つていたといつのに。

放課後、鹿島は一度と行かないと言つた保健室に行くことにした。黒田にも、謝らなければならぬ。真剣に鹿島を治療して、何度も

励ましててくれた人に。

保健室の戸を開けると、黒田が窓際で佇んでいた。手には手紙らしきものが握られている。

「もう、一度と来ないんじゃなかつたのか？」

黒田は冷淡な声をしている。怒つているのか、それとも悲しんでいるのか、まったく声から読み取れない。

「その、黒田先生。『めんなさい』。えつと、藤堂のことなんだけどね……」

「藤堂君なら、さりげなくに來たん」

「え？」

「こいつをお前に渡してくれとさ。ほら」

黒田は、手に持っていた手紙を鹿島に渡した。

「お前は、本当に良い友人に恵まれたな。『うらやましいくらいだ』

鹿島はそれを広げると、綺麗な字で、こいつ記されていた。

鹿島俊夫君へ

まず、運動会のことと言ひ訳させてほしいです。

僕は、白組の優勝よりも、鹿島君を心配しました。その理由は、僕は、鹿島君が好きだったからです。でも、これは男の子が女の子を好きなるような感情ではありません。人として、鹿島君が好きなんです。いつも前向きで、ちょっと泣き虫で。そんな鹿島君が大好きです。それに、いつも僕を心配してくれました。僕が泣いている時も、励ましてくれた。だから、僕は鹿島君を放つておけなかつたんです。絶対に、鹿島君をバカにしてやうう、とかそんなことは一切考えていませんでした。本当に『めんなね』。

もうこれ以上、運動会のことは書きません。

それと、ずっと学校に行けなくてごめんね。

あの運動会の日に、僕のお父さんは死にました。もう僕は悲しくて、悲しくて仕方がありませんでした。今日まで、手が震えて、鉛筆を握ることすら出来ませんでした。だから、学校も休んでいました。お父さんが死んじやつたのは、僕が負けたからなのかな？ 今ではもう分かりません。勝つてたらどうなつてた、とか考えたくありません。でも、鹿島君のせいじゃないのは確かです。そのことは気にしないでください。謝らなくてもいいです。

それで、僕は今日転校します。お母さんの実家に帰るんだそうです。そこは遠くて、鹿島君にはもう会えないらしいです。本当に寂しいです。

鹿島君、短い間だつたけど、本当に楽しかったです。こんな形でしかお別れを言えなくてごめんなさい。出来れば、直接言いたかったけど、きっと鹿島君が嫌がると思つて、手紙で伝えることにしました。もし、怒らせちやつたならごめんなさい。こんな意氣地なしの僕を許してください。

鹿島君に会えて、本当に良かったです。きっと鹿島君がいなければ、僕はクラスでもずっとひとりぼっちだつたと思います。もつと鹿島君と遊びたかったな。

あまり長くなるといけないので、これで終わりにします。

今までありがとうございました。また、どこかで会えると良いね。

藤堂 博

「俺……なんてことを……」

鹿島は、手紙をぎゅっと握りしめた。

手紙を読み終えた鹿島は、その場で泣いた。全身を震わせ、全力で。今までの分も、これから分も、すべての涙をこの時流した。

胸にぽつかり空いた穴に、涙が吸い込まれていく。しかし、いつまで経っても、その穴は涙で満たされない。それどころか、どんどん穴は大きく、深くなつていぐ。鹿島は、涙の海に溺れた。

手紙はぐしゃぐしゃになつていて。

藤堂のお父さんは自分が殺してしまったのかもしれない。藤堂と別れるにになつたのも、全部自分のせいだ。全部、全部！俺はなんてことをしちゃつたんだ……。

鹿島は、別れは言えなくとも、せめて、せめて藤堂に謝りたかった。そして、今まで言つひととのなかつた感謝を述べたかった。

ただ一言。ありがと、と。

十三 手紙（後書き）

次回が最終話となります、もやもやとした気分になりたくない方、この話を純粋なもので終わらせることを希望する方などは、最終話を読まず、この話を最後としてください。

十四 あつがとう（前書き）

この話を純粋な「運動会」のお話として終わらせたい方などは、この最終話を絶対に読まないでください。

十四 あいがとう

十四

すべてを語り終えた時、暗かった空からは光が差し込み、雨もすつかりあがっていた。傘はもう不要だ。彼の目の前に置かれている茶はどうの昔にぬるくなつていた。机の上には、飴の食べカスがいくつも置かれている。

鹿島は小さくため息をつく。

「これで、あの頃のお話は終わりです」

鹿島は、ハンカチで少し涙を拭く。

「なるほど……とても感動的なお話でしたね」

「感動的かどうかは知りませんがね」

鹿島は苦笑いをして、ぬるくなつた茶を一口する。短髪の男は、髪を撫でている。かすかに涙を流しているような気もある。

「それで、あなたはその子を探していると？」

「ええ。大々的な捜索をしているわけではないんですけどね。見つかれば、その子に謝つて、一言だけ、ありがとうと言いたいのです。あの時言つて忘れたありがとうをね。もう忘れてはいるかも知れませんけどね」

短髪の男はティッシュで鼻をかみ、

「それじゃあ、かなり遅くなりましたけど商談を開始しましようか」と、話を切りだした。

「おっと、話に夢中ですっかり忘れていました。名刺です」

「それでは、こちらも」

互いの名刺を受取り、まじまじと眺める。

それから、商談が始まった。

それからの商談は、鹿島が予想していた以上にスムーズに進んだ。商談は成功し、これからもひいきにしてくれるという。鹿島はその結果に喜び、取引相手も終始笑顔だった。

商談が終わると、一人は雑談をし、鹿島は会社を出た。その際、短髪の男がわざわざ会社の入口まで送つてくれた。

鹿島が立ち去ろうとした時、短髪の男が少し涙を流しながら言つ。

「それでは、これからも頑張つてください」

「何をですか？」

「あの子のことですよ。きっと探し出せます。私も、出来る限りの力添えをさせて貰います」

鹿島はほほ笑む。

「そうですか、それは助かります」

鹿島は、軽く会釈をしてから会社を後にした。水たまりを蹴とばし、会社に戻るべく元来た道を帰る。イチヨウの木から水滴が滴り、水たまりに落ちる。

ゆつくりと歩を進めていくと、鹿島のズボンのポケットで携帯電話が震え始めた。

「はい、鹿島です」

『僕だ。商談は終わつたか？』

「ああ、藤堂君か。今終わつた。契約もしつかりもらつたよ。これから、出来る限りのサポートもしてくれるらしい」

鹿島は明るい声で言う。

『そうか、それは良かつた。人の情に訴えるといつのは、本当に使えるものだ。ところで、またあの話をしたのか？』

「もちろんだわ。今日の相手は特別に同情していたよ。涙まで流

してね』

『はは。本当のこととを先方に話したら、どうなるかね?』

『俺は、嘘は言つていないのでから、どうにもならないこと。ただ、実話を商談に使つてはいるだけだ。この、心に響く良いお話を提供してくれた藤堂君には、感謝しなくちゃいけないな。皆例外なく同情して、その勢いで契約書にサインしていく。君は、会社の神様だ』

『そんなんに褒めるんじゃなによ。鹿島君』

イチヨウ並木道に笑い声がこだまする。

それから、ぷつりと電話が切れた。

鹿島は少し口元をゆがめ、ほくそ笑む。

『ありがとうございます、親友の藤堂君』

十四 あいがとう（後書き）

これで、『君へ「ありがとう』』は完結となります。

私の作品に興味を持たれましたら、前作『黒い咆哮』の方も、どうぞ宜しければ読んでみてください。作者の僅かばかりの成長が読みとれるかと思います。

それでは、これまでお付き合いいただきありがとうございました。

読者の方と、創作活動を愛するすべての人々に感謝と敬意をこめて。
また、次回作でお会いしましょう。
お疲れさまでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0188n/>

君へ「ありがとう」

2011年3月6日15時17分発行